

42259

教科書文庫

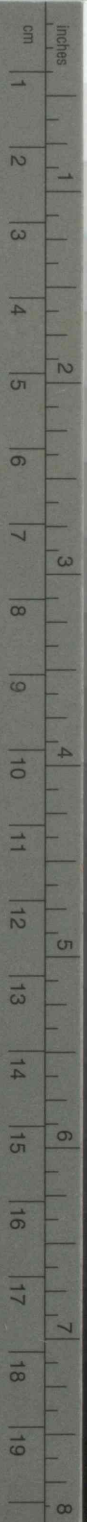
4
815
42-1929
20000 65459

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4b
815
冊4

訂改  
女子日本新文法  
全





資料室

文部省檢定濟

高等女子學校國語教科書 昭和四年十一月二十七日

46  
815  
DB4

東京帝國大學教授 文學博士 藤村作  
東京帝國大學助教授 文學士 島津久基 共著

改訂 女子日本新文法

東京 至文堂



序

中等教育の國語文法の教授に當らるゝ諸君の中に、教科書を用ゐない方が効果が多いと信ぜられる人は、教科書を用ゐないがよからう。又文法の時間を別に設けしないで、講讀、作文の中に於て授くるが適當であると信ぜられる人は、それを實行されるがよからう。教授は人に由つて生き、運用は人に由つていろくであるべきである。併し我が現今の國語教授の實際に即して、これを一般的にいへば、良い、適切な教科書を用ゐる方が無難でもあり、又有効でもある。その良い、適切な教科書とは、どういふ内容で、どういふ組織を持つものであらうか。著者にはかねて學問と實際の立場から、これに關して抱

序

一



持する意見がある。これを特に女子教育に適當なやうに工夫して  
 編纂したのが、女子日本新文法である。  
 然るに、同書も發刊以來既に五年を経過したので、こゝに修訂を加へ、  
 且つ演習問題を新にした。これを以て、本書は教授の實際に一層適  
 切になつたことと信ずる。

昭和四年七月

著 者 識

凡 例 (生徒諸子に)

- 一 文を正しく理解し、又正しく書くには、文法の知識が必要であります。そしてそれに習熟することが、一層大切であります。
- 一 本書は成るべく煩瑣な理論や説明を避けて極めて一般的な文法の知識を授け、且諸子が教へられるよりは學んで自得することの出来るやうな行き方を採りました。なほ文語法と口語法とを對照して、便宜と興味とを併せて効果を多からしめようと試みました。
- 一 規則は或程度までは記憶を必要とします。挿入してあるカードの表は、つとめて暗記に利用されたく思ひます。
- 一 理論よりは實際が大切であります。練習問題を多く入れたのは、この爲であります。そして問題も成るべく實際の文から採



りました。

一 既得の知識は断えず繰返してこれを應用練習せねばなりません。復習の項を設けてありますのは幾分なりともその機會を多くしようとの用意からであります。

# 訂改 女子日本新文法

## 目次

### 總説

一	文	一
二	品詞	四
三	品詞の轉成	三
四	複合語	一七
品詞		
五	用言の活用	三三
六	動詞の活用形	二六
七	動詞の活用の種類(一)	三五



一	四段活用	三
二	上二段活用	六
三	下二段活用	九
四	上一段活用 下一段活用	一四
ハ	動詞の活用の種類(一)	一五
五	奈行變格活用	一五
六	良行變格活用	一六
七	加行變格活用	一七
八	佐行變格活用	一八
九	形容動詞	一八
一〇	動詞の活用の識別	一九
一一	形容詞の活用及び活用形	二〇
一二	音便	二〇
一	い音便	二〇
二	う音便	二一

一三 助動詞の種類

一	受身	二九
二	使役	二九
三	推量	三〇
四	打消	三〇
五	願望	三一
六	指定	三一
七	時	三二
八	比況	三二
九	咏嘆	三三
一〇	可能	三三
一一	敬語	三三
一四	文語助動詞の活用及び種類	三四
一	動詞型活用の助動詞	三四



二 形容詞型活用の助動詞……………六

三 特殊の活用をなす助動詞……………六

一五 誤り易き助動詞の接續……………一〇〇

一六 口語助動詞の活用及び接續……………一〇六

一 動詞型活用の助動詞……………一〇六

二 形容詞型活用の助動詞……………一〇七

三 特殊の活用をなす助動詞……………一〇七

一七 活用連語……………一一〇

一八 助詞(一)……………一一七

一九 助詞(二)……………一二三

二〇 助詞の接續……………一二六

二一 副詞……………一三六

文

二二 文の成分(一) 主語 述語……………一四四

二三 文の成分(二) 補語 附文主……………一五〇

二四 文の成分(三) 修飾語……………一五五

一 形容詞的修飾語……………一五七

二 副詞的修飾語……………一五九

二五 句及び節……………一六四

二六 文の種類……………一七〇

一 單文……………一七〇

二 複文……………一七〇

三 重文……………一七〇

一 平敘體……………一七一

二 疑問體……………一七一

三 感動體……………一七一

四 命令體……………一七一

二七 係結 附呼應……………一七五



目次終

訂改 女子日本新文法

總說

一文

【一】 我々が或一つのまとまつた考へを述べる時は、  
花が 三折 咲く。

この繪は 美しい。

紫式部は 平安時代の才女である。

のやうに、必ず何が どうく、だといふ言ひ方をする。

可愛らしい白い小犬が、 樂しさうに庭の芝生の上を驅



け廻つてゐる。

といふやうな長い例でも、また

あなたは 動物園へ行きましたか。

といふ問の場合でも、やはり、何が どう〜だ。といふ形である。

又口語ばかりでなく、

花 咲く。

紫式部は 平安時代の才女なり。

のやうに、文語でもさうである。

この「何が どう〜だ」といふ形が、既に一つの立派な文章であつて、つまり、何でもよい、或一つのまとまつた考へを言ひ表したものが即ち文である。そして、この「何が」といふ部分が、その言ひ表さうとする考への主題となるのであるから、これを主部と名づけ、どううだは、その主題について、そのはたらき(動作)ありさま(状態)な

文部  
主部

述部

どを述べる部分であるから、これを述部と名づける。即ち、文は主部と述部との二つの成分から成立つてゐることになる。

文||主部+述部

練習一 左の文を主部と述部とに分て。

- 一 私わたしは谷間やまの白百合しらゆりです。
- 二 ああの列車れっしゃも神戸ごんぶ行ゆきですか。
- 三 新鮮あたらな朝あさの空気くわいは、冷たいひやいほどである。
- 四 町まちの燈あかりが、小さくちひさく點々ちりちりとして光あかりつてゐます。
- 五 鏡かがみの如ごとくなりし海面うみ、見るみるゝ怒濤いかだの山やまと化かしぬ。

【二】 文の完全な形は、必ず主部と述部の二成分から成立つべきであるが、どちらか一方が省かれても意味が明らかかな場合は、これを省くことがある。

(これは變だ。



私はこれから學校へ行きます。あなたもこれから學校へ行きますか。

のやうなのがそれである。しかし、これは決して主部や述部が無いのではなくて、省かれてゐるのだといふことを忘れてはならぬ。

練習二 文の二成分とは何か。例を舉げて説明せよ。

練習三 左の文は、何れの成分が省かれてゐるか。

一 賢なる哉。

二 あゝ、くたびれた。

三 何を讀んでいらつしやるの。

四 姉も笑ひぬ。叔母も笑ひぬ。弟も、妹も。

五 あなたは日光を見物なされたことがありますか。えゝ、あります。

### 二 品 詞

單語

【三】 文はその表してゐる考への上から見れば、主部、述部の二成分に分れるが、その各成分は、また、これを組立ててゐる材料であるいろ／＼な語に分たれる。その一つ一つを單語と名づける。

父の恩は 山より高し。

といふ文の主部は、「父」の「恩」は、この四つの單語に、述部は「山」より「高し」といふ三つの單語に分つことが出来る。即ち文は單語の集りである。しかし、ただ單語が集つただけでは文ではない。主部と述部とが備つてゐて、あるまとまつた考へを表してをらなければ、如何に長く單語を連ねても、それは文とはいへない。

●單語が二つ以上結びついたので、連語といふ。

●二つ以上の單語が合して更に一つの單語となつたものを複合語又は熟語といふ。

父母 動物園 高等女學校 うち勝つ 心細し

連語  
複合語



名詞

【四】 文の材料となる單語は無數にあるが、その性質作用等の上からこれを種類別にすれば、僅かに九種類となつてしまふ。

一 名詞 人又は事物の名稱。

紫式部は平安時代の才女なり。

父の恩は山より高し。

健康は財寶にまさる。

二 代名詞 名詞の代に用ゐられる語。

おまへは感心だ。

あの話はまづこれで中止にしておきませう。

かなたに聳ゆるは富士山か。

【注意】 「吾人、小生、誰、何、いつれ等も代名詞である。

● 名詞代名詞は主に主部に用ゐられる語の種類である。これを總稱して體言といふ。

體言

動詞

三 動詞 事物の動作存在をいふ語。

犬が走る。

勳一等を授けられたり。

宮城は東京に在り。

四 形容詞 體言の上又は下について、主に事物の性質・状態を表す語。

青い鳥

風清く涼しき夕

父の恩は山よりも高し。

五 助動詞 主に動詞又は他の助動詞の下について、その作用を助ける語。(稀には體言の下につく。)

雨が咲いた。

雨なほ止まず。

助動詞

形容詞



用言

副詞

接續詞

助詞

特に從二位に叙せられたり。  
東京は日本の帝都なり。

【注意】「あり」は動詞なり、「たり」は助動詞であることを記憶せよ。  
●動詞・形容詞・助動詞は主に述部に用ゐられる語の種類である。總稱して用言といふ。

六 副詞 動詞・形容詞又は他の副詞の意味を限定する語。  
雨なほ止まず。

あの犬は大層早く走る。

七 接續詞 語又は文を接續する語。

五月の空、晴れ又曇る。

鉛筆或はペンを持参すべし。

よろしい。それでは申しませう。

八 助詞 他の品詞の下について、他語との關係若しくはい

感動詞

品詞

九 感動詞 感動した時に發する聲。

あゝ悲しい哉。

おやお珍しい。

【注意】「嗚呼、噫」など漢字で書いてあつても同じく感動詞である。  
「おい、もし〜」さあなど誘起の爲に用ゐられるものもある。

【五】 以上の名詞・代名詞・動詞・形容詞・助動詞・副詞・接續詞・助詞・感動詞の一つ一つを品詞と名づける。即ち國語は九品詞から成つてゐる。どんな文でも、主部と述部に分けられると共に、又その單語は一つ一つ必ず九品詞のどれかに屬するのである。



【注意】 一々の單語は必ず一つの品詞である。しかし單語といふ言葉と品詞といふ言葉との意味を混用してはならぬ。單語といふのは語の構造上の名で、品詞といふのは語の性質上の名である。

**練習四** 左の文中から名詞及び代名詞を抜出せ。

- 一 吾が輩は猫である。
- 二 世間ではしきりに生活の改善を叫んでゐる。
- 三 この履物をあちらの出口へ廻しておきませうか。
- 四 あなたはそれとこれとどちらがお好き。どれでもお好きな方をあなたに上げませう。

**練習五** 左の文中から接續詞を抜出せ。

- 一 南東の風晴但し驟雨。
- 二 一日三回白湯或は水にて服用すべし。
- 三 ですけれども、随分心配したんですの。
- 四 叩けよ、さらば開かれむ。

**練習六** 左の文中から感動詞を抜出せ。

- 一 まあ、お久しぶりですこと。
- 二 すぐに参りませうよ、さあ。
- 三 はい、それでもう澤山なので御座います。

**練習七** 次の表の各欄に相當する各品詞の例を言へ。

品詞	例
名詞	
代名詞	
動詞	
形容詞	
助動詞	
副詞	
接續詞	
助詞	
感動詞	



三 品詞の轉成

【六】 國語には九つの品詞があることは既に學んだが、同一の單語でも、その用法によつて或品詞から轉じて他の品詞となる場合がある。これを品詞の轉成といふ。

一 名詞に轉成したもの

校歌の合唱終りて式は閉ぢられたり。  
終を全うすべし。

前の文の「終り」は動詞、後の文の「終」は轉じて名詞となつたものである。「光」「氷」「霞」「申込」「請取」など皆これである。又、

白の上着

のやうに形容詞から轉成することがあり、

哀を知るは武士の習。

などは感動詞から轉成したのである。

二 代名詞に轉成したもの

賢き君の御代。

これは君の本ですか。

前の文の「君」は名詞、後の文のは代名詞である。「僕」「わらは」「小生」「閣下」なども、名詞が代名詞に轉じ用ゐられることがある。

三 副詞に轉成したもの

今日の地理の試験はやさしかつた。

今日地理の試験がある。

餘る程ある。

餘りひどい。

風烈しく波高し。

風烈しく吹く。

(名詞)

(副詞)

(動詞)

(副詞)

(形容詞)

(副詞)



副詞には、本来のものの外名詞、動詞、形容詞などから轉成するものが多い。

四 接續詞に轉成したもの

それまでの間が大切だ。

無事到着致候間、御安心下され度候。

いづれも正しい。

いづれ、また明日。

父に従ひて松島に遊ぶ。

従ひて女子の任やまた重しといふべし。

それはなほ面白からう。

なほ改めて御相談致しませう。

練習八 「先生」といふ語が、名詞として用ゐられた文と、代名詞として用ゐられた文を作れ。

(名詞)

(接續詞)

(代名詞)

(接續詞)

(動詞)

(接續詞)

(副詞)

(接續詞)

練習九 左の文中——線を附した語の品詞を問ふ。

一 別れを惜しむに似たり。

二 西と東へ別れた。

三 眞夜中に荒々しく戸を叩く者がある。

四 會するもの無慮數百名に及びたり。

五 名詞及び代名詞を體言といふ。

六 あはれ太閤世を去りて世つぎの君は幼し。

七 あはれを告ぐる遠寺の鐘。

【七】 轉成とは少し違ふが品詞を指摘する場合に注意を要するのは接續詞と助詞とである。「で」「が」「ど」などは、文の或部と或部とを續けるための語であるから接續詞と思ひ易いが、これは助詞である。即ち同じ接續の意味を表してゐる語でも、獨立して意味を有するものは接續詞で、單獨に完全な意味を表せないのは助詞だ



と思へばよい。

感動詞と感動の意味を表す助詞との區別も同様である。

練習一〇 左の文中——線の語は接續詞か助詞か。

- 一 昔々、爺と婆があつたとさ。
- 二 そんなら、お前と驅けくらべ。
- 三 よい發明だが、しかし應用はむづかしからう。
- 四 やがて樂長は指揮棒を執つて立ちました。
- 五 折ふし北風烈しくして、扇はくるりくるりとまはりけり。

練習一一 左の文中の感動詞と感動の意味を表す助詞とを指

摘せよ。

- 一 なに、かまひませんよ。
- 二 あら有難や。忝や。
- 三 すは、火事よ。

- 四 かくて彼は終に逝けり、あゝ。
- 五 碑の面に記して曰く、嗚呼忠臣楠子之墓と。

#### 四 複合語

【八】 單語はそれぞれ一つの品詞であることは勿論であるが、二つ以上の單語が結びついて出來た複合語、即ち熟語も無論一つの品詞である。一見すると二三語のやうに見えるから、迷はないやうにしなければならぬ。例へば、

- 人々〔人＋人〕 渡邊の綱 高等女學校
- 我々〔我＋我〕 吾人
- 物語る〔物＋語る〕 咲きそむ
- 軽々し〔輕＋輕し〕
- 誠に〔誠＋に〕 決して 度々



それから「それ+から」 加之「し+か+のみ+なら+ず」  
なるべし「なる+べし」

にて「に+て」として をして  
いでや「いで+や」 なるほど やれ〜

の如き、或は同品詞、或は異品詞が重なつて出来た複合語であるが、  
いづれも各、一つの品詞と見るべきである。

練習一二 右の例に挙げた諸語の品詞を示せ。

【九】 複合語の中には、

眞白 空 お肴 御飯 おほ君 第一 け高い か弱い  
さ迷ふ た易く かき曇る

などの如く、「眞」み、「お」御、「おほ」第、「け」か、「さ」た、「かき」のやうな、  
立した單語としては用ゐられぬものが、諸品詞の頭について出来  
たものもある。これらの「眞」み等を接頭語と名づける。これら

接頭語

の中には、その品詞にそれぞれの意味を添へるものもあり、ただ調  
子を強める爲のみに用ゐられるものもある。

また、

伯父御 我等 私ども 子供達 二つづつ 重み 春めく  
迷惑がる 女々しい 學者ぶる

の「御」等、「ども」達、「づつ」み、「めく」がる、「しい」ぶるなどは、同じやう  
に諸品詞の尾について、複合語を造るから、接尾語と名づける。こ  
れらは、もとの品詞を複数にしたり、又はそれぞれの意味を添へて  
品詞の所屬を轉じたりするが、やはり獨立しては意味をなさない  
語である。

練習一三 右の例の諸語の品詞を示せ。

【注意】「接頭語、接尾語」と接頭語のついた語、接尾語のついた語とを混同して  
考へてはならぬ。

接尾語



練習一四 接頭語の中には、幾つも重なつて出来てゐる念入り  
なのがある。

おみ足  
おみおつけ

などがさうである。これらは丁寧にいうたのである。他に  
同じやうな面白い例はないか。

練習一五 接頭語と接尾語とを同時に有する複合語の例を考  
へて見よ。

練習一六 左の文中から接頭語或は接尾語を有する複合語を  
拾出して、その品詞を言へ。

- 一 あれを御覽なほ。
- 二 大御心のかしこさよ。
- 三 観客は四方から押寄せた。

- 四 その苦しさいつたら、とてもお話にならぬ。
- 五 他人がましいいことをおつしやりますな。
- 六 大人ぶる勿れ。學生らしくあれ。
- 七 老僧の態度には何となく親しみが感じられた。
- 八 入學願書は来る三月十日までに御差出しに相成度候。
- 九 いかが取計らひませうか。
- 一〇 打向ふたびに心を磨けとや鏡は神の作りそめけむ。

復 習 一

練習一七 左の文の——線の右に各の品詞を記せ。

- 一 源の義家は鎮守府將軍頼義の嫡男にして八幡太郎と稱す。
- 二 國亂れて忠臣出づ。
- 三 もしく、龜よ龜さんよ。



四 お山のお山の細道は、だれだれ通るだれ通る。

狐の親子の通る道、月夜に狸の通る道。

五 父と母といづれがよきと子に問へば、父よと言ひて母をかへりみぬ。

品詞

五 用言の活用

【10】 今こゝに、

花(が) 咲く。

といふ文がある。是を、主部はそのまゝにしておいて、述部を同じ「咲く」といふ語で、いろ／＼に書きかへて見る。

文語

花 咲く

花 咲く  
咲く  
咲く

口語

花が 咲く

花が 咲く  
咲く  
咲く



花 咲（き）たり  
 花 咲かず  
 花 咲けば  
 花 咲く時  
 花 咲かむ  
 花 咲かば  
 花 咲けど（も）  
 花 咲きそむ  
 花 咲きて  
 花 咲（き）たるなるべし  
 花（よ）咲け

花が 咲（き）ました  
 花が 咲か（な）ぬい  
 花が 咲けば  
 花が 咲く時  
 花が 咲（き）かう  
 花が 咲（き）ませう  
 花が 咲（き）いたら  
 花が 咲（き）いたけれど（も）  
 花が 咲きそめる  
 花が 咲（き）いて  
 花が 咲（き）まして  
 花が 咲（き）いた（の）であらう  
 花（よ）咲け

かう書き並べて見ると、すぐ氣のつくことは、

第一 「花」といふ名詞は形が變らないのに「咲く」といふ動詞はいろいろな形に變ること

である。即ち形の變らぬ名詞を同じ主部にしても、その述部の動詞は同じ語でありながらさまざまに形が變る。なほ他の品詞の例を取つて、よく調べて見ると、代名詞の場合も名詞と同様に形は變らないが、形容詞であると、

水（が）清（く）流る 清（き）き水 水（は）清（い）けれど  
 のやうに變り、助動詞も、

咲（き）いたれば 咲きたり咲いた 咲きたる（いた）時  
 のやうに變る。つまり名詞及び代名詞、即ち體言は形が變らぬが、動詞・形容詞及び助動詞、即ち用言は形が變る。この用言の形の變ることを活用若しくははたらきといふ。



活語

語語  
尾幹

●體言といふのは文の主部になる語で、活用せぬからの稱であり、用言といふのは文の述部になるもので、活用する語だから名稱である。

【一】次に、また前の例について見ると、

第二 用言の活用はその語が全部形を變へるのではなくて、

形の變る部分と變らぬ部分とがあること

に氣がつくであらう。即ち「咲」だけはそのまま、語の末尾の部分のみが「く」とか「き」とかいふやうに變つて、下の語に連るのである。この變化せぬ部分を語幹といひ、變化する部分を語尾といふ。

【注意】語尾とそれに連る他の品詞とを混同してはならぬ。

【一】さて、語幹は二音以上の場合でも、普通、假名を送らないが、語尾は幾つかの例外を除けば、すべて假名を送らねばならぬ。故に、

花が咲きました

花咲らむ

は誤であり、また、

花咲けり

は「花咲きけり」と讀むのでないことはすぐわかる。

【注意】もし假名を送らずに、

花 咲ぬ

としたら「さきぬだか、さかぬだか判明せぬ。然し「也、候、曰く、或日、非ず等」には「り、ふ、は、る、ら」等を附けぬ慣例になつてゐる。

練習一八 用言の活用とは何か。

練習一九 左の語を語幹と語尾とに分て。

聞く 結ぶ うち勝つ ころがる 待ち遠い

練習二〇 左の文に誤あらば正せ。(慣例あるものは、慣例に随つて改めよ。)

一 近頃は毎日雨の降ぬ日は無く。



- 二 無用の者入べからず。
- 三 昔々或る所に爺と婆があつたとさ。
- 四 明ましておめでたう。
- 五 恭しく新春を賀し奉り候らふ。
- 六 バラ／＼と栗の實が落ちて來ました。
- 七 御光來の折は電話で御知らせ下さい。
- 八 昨日お友達から坊ちゃんを借て來ましたが、まだ讀ません。

### 六 動詞の活用形

【一三】 動詞は活用するものであることは既に學んだ。その活用とは語尾の變化することである。語尾の變化は、その下に連る語によつていろ／＼と異なる形になることである。その下に連る語は無數であるが、結びつき方はどの動詞でも皆六通りより多

くはない。今順次その六つの形に就いて述べよう。

一 花咲かむん 花未だ咲かず

の如く「咲か」といふ形は、「ば」「むん」「ず」などに連り、動作の未だ成立せぬ意を示すのであるから、これを未然形といふ。

未然形  
將然形と呼ぶ  
人もある。

【注意】 口語では「むん」の代に「う」或は「よう」に連り、「ず」の代に「ぬ」「ない」に連る。

それ故、

今に咲こうよ 本を讀もう

などは誤で「咲かう」「讀まう」とすべきである。

二 花咲きそむ 花咲きたり

のやうに、動詞や助動詞に連るには「咲き」といふ形である。用言に連るのだから連用形といふ。(形容詞にも無論この形から連る。)

- 動詞が名詞に轉成するのはこの形である。「光」「氷」など。
- 助詞で「に」連るのはこの形である。

連用形



音便

●連用形から「て」「たり」「た」に連る時、動詞の語尾が「い」「う」「ん」「つ」等に変ることがある。これを音便といふ。

咲きて——咲いて　　言ひて——言ひて  
讀みて——讀んで　　持ちて——持つて

口語ではこの音便の方が普通な位で、

咲きて　　咲きた  
讀みて　　讀みた

などとはいはない。が、これはすべての動詞ではなく、又「て」「た」に連る時だけ、他の語例へば「ます」などには、

咲きます　　讀みます

と元來の形のまゝで連る。音便のことは後に詳しく述べる。

三 花咲く

のやうに「咲く」といふ形は、文を結び止める形であるから終止形といふ。これが動詞の本體である。動詞を擧げるには、いつもこの

終止形

連體形

形で示すのである。

四 花咲く時　　花咲く春

このやうに、この形は名詞・代名詞に連る形にもなる。體言に連るから連體形と名づける。

五 花咲けば　　花咲けど

のやうに「咲け」といふ形は、「ば」「ど」「ども」等の助詞に連り、動作の已に成立つた意を示す形だから已然形ぜんけいといふ。

已然形  
已然形と呼ぶ人もある。

●咲かばは未然形、咲けばは已然形である。但し口語では

雨が降れば参りません

のやうに已然の形を未然の意味に用ゐてゐる。

六 花(よ)咲け

のやうに、この形は、また命令の意味を表すに用ゐられる。これを命令形と名づける。

命令形

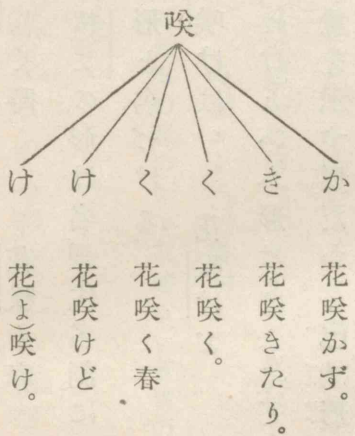


● 動詞の種類によつては「見よ、起きろ」の如く、命令形に助詞よ（口語ではよ）又は「ろ」をつけるものがある。

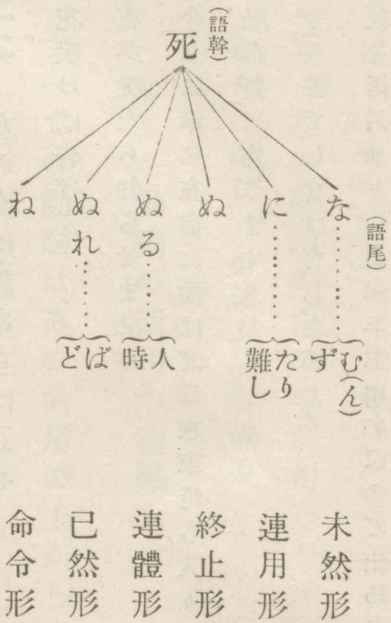
活用形（語形）

以上の未然形・連用形・終止形・連體形・已然形・命令形の六つを動詞の活用形若しくは語形といふ。

【一四】 どんな動詞でも必ずこの六つの語形をもつてゐる。「咲く」といふ動詞は、即ち



と活用する動詞である。又「死ぬ」といふ動詞などは、



の如く、六つの語形が悉く變つてゐるが、他の多くの動詞は、「咲く」が終止と連體「咲け」が已然と命令といふやうに、一つの形で二つ以上兼ねてゐる。

練習二一 左の文中の動詞の活用形を問ふ。

- 一 右へ行け。
- = 悔ゆれどもそのかひなし。



- 三 汝に出づるものは汝に還る。
- 四 雨降らば降れ。風吹かば吹け。
- 五 いたくあはれがりて養ひ取り給ひけり。
- 六 盗人を捕へて見れば吾が子なり。
- 七 名月を取つてくれろと泣く子かな。
- 八 夕煙今日は今日のみ立てて置け明日の薪は明日取りて来む。

練習二二 左の文に誤あらば正せ。

- 一 花咲けば告げん。
- 二 花が咲たら知らせませう。
- 三 今夕は幸に在宿に候はば御來車待ち入り候。
- 四 私が買て参ります。
- 五 もう書てしまひましたのよ。
- 六 枝を折ろうとしたが手が届かぬので止めた。

七 人はよし笑へば笑へ 我はただ我が信ずる道を行かんのみ。

練習二三 左の動詞の六つの活用形を示せ。

書く 進む 引結ぶ 打破る

七 動詞の活用の種類 (一)

【二五】 すべての動詞はその活用の上から、文語では九種類、口語では五種類に分たれる。

一 四段活用

「咲く」といふ動詞は、

(語幹)	未然	連用	終止	連體	已然	命令
咲	か	き	く	く	け	け

と活用することは前に述べた通りである。その他、



四段活用

と活用する。即ち終止と連體、已然と命令とが同じ形で、形は六つだが、ちがつた役は結局四つで、それが五十音圖の上から四段(ア段)イ段、ウ段、エ段に當るので、これを四段活用と名づける。

又すべての動詞の活用は、必ず五十音圖の同一行の中に於て行はれる。「咲く」は活用が加行中の四段に行はれるから「加行四段活用の動詞」といひ、「押す」は「佐行四段活用の動詞」である。

- 命令形には「よをつけ、ない。」
- 四段活用は口語も文語も同じである。ただ口語では連用形が音便で「い。」

	笑	待	押
ア	は	た	さ
イ	ひ	ち	し
ウ	ふ	つ	す
エ	へ	て	せ
	へ	て	せ

「う等になることが多い。」

- 随つて、口語の未然形も亦ア段でなければならぬことに注意するがよい。(第六章、一三二注意参照)

練習二四 左の四段活用の動詞を活用させよ。

(語幹) 未然 連用 終止 連體 已然 命令

置 消 待

練習二五 右の例に倣つて次の四段活用の動詞をはたらかせよ。

聞く 動く 驚く 打驚く 騒ぐ 貸す 打つ 行ふ 失ふ  
 云ふ 添ふ 給ふ 養ふ 飛ぶ 見失ふ 附添ふ 惜しむ  
 成る 語る

○印を附した語は特に練習して記憶せよ。







上二段活用

の如く、未然・連用命令は同形で共にイ段・連體に「已然」に「れ」が添はるが、終止と共にこれはウ段である。即ち五十音圖の一行中イ・ウの二段、即ち中央より上の二段に活用するから、上二段活用と名づける。「起く」は「加行上二段活用」の動詞である。

●上二段活用の命令形には必ず助詞「よ」を添へる。

練習二八 左の上二段活用の動詞を活用させよ。

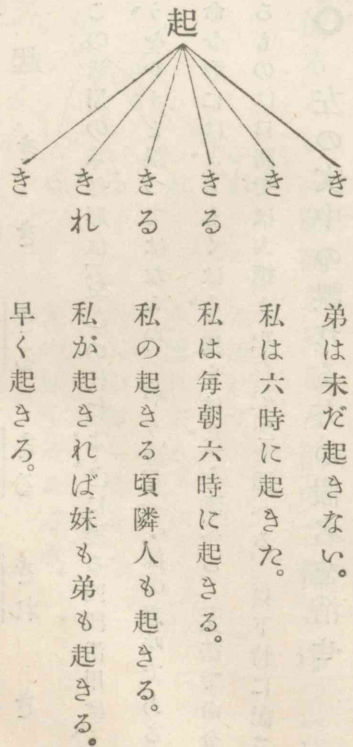
- 生く 盡く 恥づ 閉づ 強ふ 忍ぶ(四段にも) 恨む(上)
- 延ぶ 試む 老ゆ 悔ゆ 過ぐ

練習二九 左の文中に誤あらば正せ。

- 一 己の長を誇る勿れ。己の短を恥ず勿れ。
- 二 人はパンのみにて生くものにあらず。
- 三 老ひては子に従う。
- 四 その慘状見るに忍ばず。

○印を附した語は特に練習して記憶せよ。

- 五 過ぎる月日は矢の如し。
  - 六 落武者薄の穂に怖ず。
  - 七 後に及んで悔いるとも詮なからん。
  - 八 一度試む時は直ちに使用法を會得すべし。
- 「起く」は口語では終止と連體とが同形で、



の如く、「イ・イ・イル・イル・イレ・イ」とイの一段に活用する。文語と對照すると、終止・連體・已然の三つが違ふ。



	(語幹)	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(文語)	起	き	き	く	くる	くれ	き
(口語)	起	き	き	きる	きる	きれ	き

●この活用の未然形は「むん」の代に「よ」に連る四段活用は「う」に連るが、「よ」を「やう」と誤つてはならぬ。「やう」は「如し」様の意味である。

●命令形には「よ」もしくは「ろ」「禁止は「な」を添へる。(文語で命令形に「よ」を添へるものは口語では大抵「よかろか」なを添へる。以下特に記さぬ。)

練習三〇 左の文中の誤れる方の假名を消せ。

- 一 もう起きようぢやないか。
- 二 危くころがり落ちようとして漸く踏み留まつた。
- 三 船は鏡のやうな海面をすべる。
- 四 恩を仇で報ひようとは。
- 五 これで少しは懲りよう。

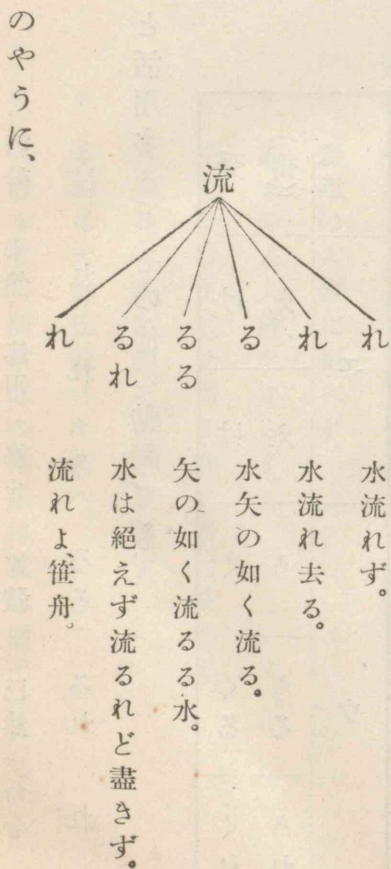
六 そのやうな事は強ひないがよい。

練習三一 左の動詞の活用形を問ふ。

- 悔いる 悔ゆる 試むる 試みる 生きる 老ゆる 強ふる
- 強ひる 報いる

三 下二段活用

【一七】「流る」といふ動詞を見ると、前の二種と違って、





(語幹) 未然 連用 終止 連體 已然 命令  
流 れ れ る るる るれ れ

と活用する。その他の動詞でも、

以下( )内に入  
れてある語は  
「得」と同じく語  
幹と語尾とを分  
つことのできぬ  
語である。

	受 (得)	え	け	え	け	う	く	う	くる	う	くれ	う	れ	え	け
		エ		エ				ウ						エ	

下二段活用

と、未然連用命令は同形でエ段連體に「る」、已然に「れ」が添はるが、終止と共にウ段である。即ち五十音圖中のエ段とウ段、即ち中央より下の二段に活用するから、これを下二段活用と名づける。「流る」は「良行下二段活用の動詞」である。

●これも命令形には必ず「よ」を添へる。

練習三二 左の下二段活用の動詞を活用させよ。

○印を附した語  
は特に練習して  
記憶せよ。

授く 妨ぐ 助く 投ぐ 告ぐ 馳す 仰す 任す 出づ  
 棄つ 兼ぬ 尋ぬ 重ぬ 興ふ 寝ぬ 換ふ 取換ふ 數ふ  
 考ふ 答ふ 堪ふ 傳ふ 仕ふ 終ふ 唱ふ 改む 誠む  
 留む 始む 求む 消ゆ 聞ゆ 榮ゆ 越ゆ 絶ゆ 殖ゆ  
 凍ゆ 燃ゆ 覺ゆ 恐る 離る 生まる 倒る 別る 忘る  
 飢う 植う 据う

練習三三 左の文中に誤あらば正せ。

- 一 參詣の人常に絶へず。
- 二 出で迎ふ人数を知らず。
- 三 先を争ひて馳せ向ふ若武者二騎あり。
- 四 陳列品に手を觸ることを禁ず。
- 五 榮ふる大御代祝へや祝へ。
- 六 式終りて一同校庭の南隅に記念樹を植ゆ。



練習三四 左の文中○の箇處に適當の假名を埋めよ。

- 一 飢○たる者は食を擇ばず。
  - 二 與○るは受くるよりも幸なり。
  - 三 今に傳○てなほ美談とす。
  - 四 指折り數○れば已に七年の昔となりぬ。
  - 五 彼女の斷○る事なき努力は遂に今日の成功を致せるなり。
  - 六 應○るものはただ山彦の聲のみなりき。
  - 七 終に眠るが如く息絶○ぬ。
- へ 何故に訴へ出てざりしぞと問○給○どなほ娘を前に据○たるま  
ま一言もえ答○奉らざりけり。

「流るは口語では終止と連體とが同じ形で、

と活用する。口語と文語とを比べて見ると、

	(語幹)	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(文語)	流	れ	れ	る	る	る	れ
(口語)	流	れ	れ	れる	れる	れ	れ

で、上二段と同じく終止連體・已然の三活用形だけが違ふ。

●未然形から、ように連ることも上二段活用の場合と同じである。

●い出づ、い寝ぬは、口語では、い出る、い寝るとなつて語幹と語尾との區別がない。

練習三五 練習三二の動詞の口語活用を記せ。

練習三六 左の文中に誤あらば正せ。

- 一 水が漫々と湛へられてゐる。
- 二 音信はとうから斷へてしまつてゐる。
- 三 今からすつかり改めやうと思ふ。
- 四 いろ／＼の感想が交る／＼私の胸に浮んでは消へて行く。
- 五 光陰は全く矢のやうに飛び去ります。



練習三七 左の文中の誤れる方の假名を消せ。

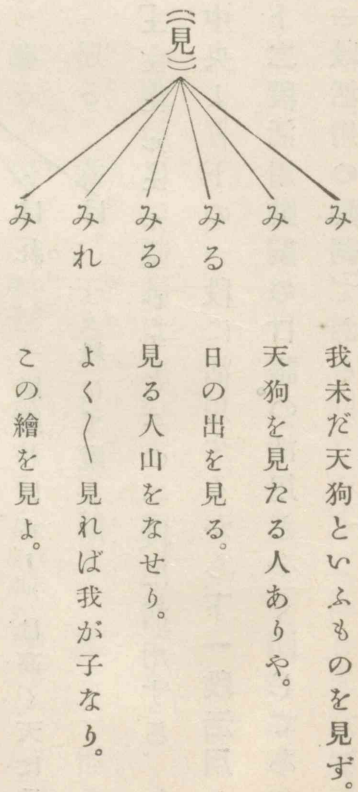
- 一 これが私共の植えた樹です。
- 二 「教おしゆるは學ぶの半ばといいふことがある。
- 三 飢うへやうが凍こえやうがかまはぬ。
- 四 重ねかさやうがまづいね。
- 五 困苦に堪たへる習慣を養やしなひたいものだ。
- 六 私も老おいた。然しこのままして朽ち果てやうとは思はぬ。

練習三八 文語の上二段活用と下二段活用とは四段活用と何

處が違ふか。

四 上二段活用 下二段活用

【二八】「聞く」といふ動詞は四段であるが「見る」はさうではない。上二段でも下二段でもない。これは



と活用する。その他、

	(著)	(射)				
	き	い	イ			
	き	い				
	きる	いる				
	きる	いる				
	きれ	いれ				
	き	い				

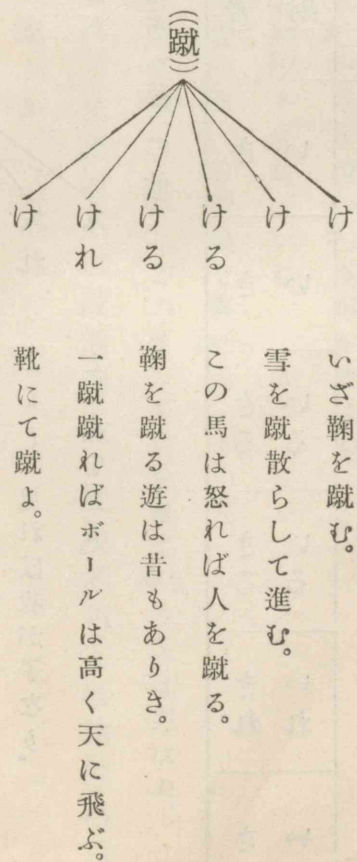
上二段活用

の例でも「イ・イル・イル・イレ」と、イの一段に活用する。即ち五十音圖中の中央より上の一段に活用するから、上二段活用といふ。



(文語上二段活用動詞の口語の活用と全く同じである。「見る」は「麻行上一段活用の動詞」である。

【一九】 又「蹴る」といふ動詞は、



のやうに「エ・エ・エル・エル・エレ・エ」と、エの一段に活用する。即ち五十音圖中の中央より下の一段に活用するから、**下一段活用**と名づける。(文語下二段活用動詞の口語の活用と全く同じである。「蹴る」は「加行下一段活用の動詞」である。

下一段活用

【二〇】 この二つの活用は形も同じやうで、即ち未然連用命令が同形、且終止連體がまた同形で共に「る」が添はり、已然形には「れ」が添はる。

文語の上一段活用の動詞は左の十三語だけである。

- 著る 似る 煮る 干る 見る (顧る 鑑る 惟る)
- 射る 鑄る 居る (は違ふと) 用ゐる (波行上二段に) 率ゐる

文語の下一段活用の動詞は「蹴る」の一語しかない。(「蹴る」は口語で用ゐられることが多い)

上一段活用下一段活用は、口語の場合も文語の場合と全く同じである。文語の上二段下二段の動詞は、口語の時は上一段下一段に活用する。(二六二七参照)即ち口語には二段活用といふのはないのである。

●上一段下一段とも命令形には必ず「よ」を添へる。



● 兩種とも口語では未然形から「よう」に連るのである。

【注意】「居る」は和行上一段だから「いる」は誤である。

練習三九 右に挙げた上一段活用の動詞を活用させよ。

練習四〇 左の文に誤あらば正せ。

- 一 早く煮れ。
- 二 これこそ昔の名工が鑄りたる佛像なれ。
- 三 良薬も多量に用ゆれば却つて身體を害す。
- 四 何を考へていたのです。
- 五 鞠を蹴ようぢやありませんか。
- 六 鞠を蹴ろうぢやありませんか。
- 七 着物の着やうがわるいといつても御祖母様に叱られます。
- 八 卵を煮やうとして時計を煮た學者もある。
- 九 「おれも射ろう。おまへも射ろ。」と射手の一人が先刻から頻りに彼

に勧めている。

○ この勞苦は實に祖先の尊き遺訓にして、我等青年子女の相共に大に鑒むべきところなりとす。

### 八 動詞の活用の種類 (二)

【二一】 大概の動詞は上述の四段上下二段上下一段の五種の活用のいづれかに屬するが、その他にとりのけ(除外例)の動詞が四種ある。これを變格活用の動詞と名づける。

#### 五 奈行變格活用

【二二】 「死ぬ」といふ動詞は第六章「一二」に述べたやうに、

(語幹)	未然	連用	終止	連體	已然	命令
死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

と活用して、六つの活用形が悉く違ひ、四段活用のやうでもあり、二



奈行變格活用

段活用のやうでもある一種特別な活用である。そしてその活用が奈行に限るので、奈行變格活用といふ。

この種類に屬する動詞は「死ぬ」の他に、現代文には餘り用ゐられぬ「往ぬ」だけがある。

● 口語では奈行變格活用は四段活用になつてゐる。

● 文語「死ぬ」は現代文では四段活用に用ゐることがある。

● 命令形には「よ」をつけない。

練習四一 左の動詞を活用させて比較せよ。

(文語奈行變格)

往<sup>い</sup>

(文語奈行下二段)

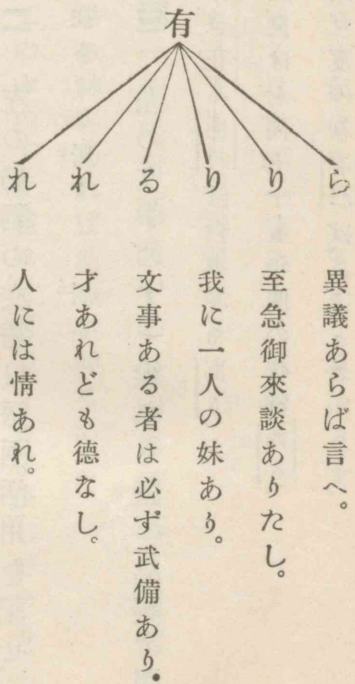
寢<sup>い</sup>

(口語奈行四段)

死

六 良行變格活用

【二三】 「有り」といふ動詞は、



と活用し、頗る四段活用に似てゐるけれど、これを對比すると、

(語幹) 未然 連用 終止 連體 已然 命令

取	ら	り	り	る	れ	れ
有	ら	り	り	る	れ	れ

と、同じく四段にはたらくが、終止形が、一方はウ段、一方はイ段であるのが違ふ。よつてこの「有り」のやうな活用を良行變格活用といふ。

良行變格活用



これに属する動詞は「有り」「在り」の外に「居り」(現代文では「四」)と、現代文には餘り用ゐぬ「侍り」とがある。

なほ後に説く形容動詞と稱するものは、形容詞・副詞が「有り」と複合したのだから、すべて良行變格活用に属する。

●口語では良行變格活用は四段活用になつてゐる。

●この活用も命令形には「よがつかない」即ち九種の文語動詞の活用中命令形に「よがつかない」のは四段・奈變・良變の三種である。

練習四二 左の動詞の文語・口語兩活用を記せ。

在り 居り 居る

練習四三 左の文中の——線ある語の品詞を問ふ。

- 一 赤き花もあれば白き花もあり。
- 二 奈良は七代七十五年間の帝都たり。
- 三 未だ夏の初なれば、さほど暑からず。

四 明日天氣になれ。

五 願はくは君が一家の上に祝福あれ。

六 あれ、あれを御覽なさい。

練習四四 左の口語文中の○印の箇處に適當な假名を埋めよ。

- 一 棄○る神があれば助○る神もあ○。
- 二 向ふの木の下に隠れて居○うと相談して○る。
- 三 あ○うことか、あるまいことか。主人の目を掠めて非道を働きな○がら、少しも恥○ぬとは呆れたものだ。
- 四 彼は人が居○うが居まいが少しも頓着せず、せつせと自分の仕事を勵んで居○ます。

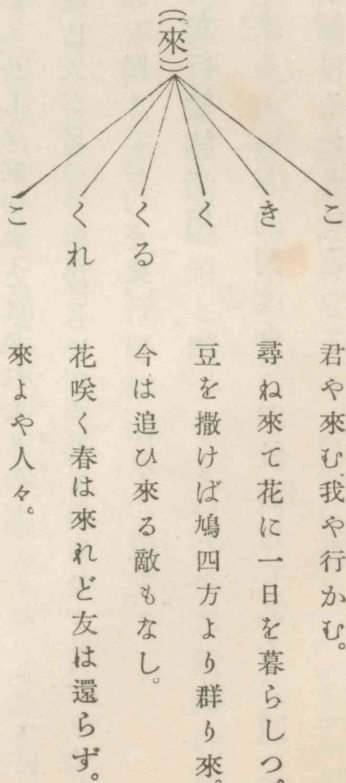
七 加行變格活用

【二四】「來る」といふ動詞は良行四段活用であるが、同じ意味の「來」といふ動詞は、それとは違つて、



加行變格活用

といふやうに、



と活用し、未然と命令とが同形で、他は皆形が違ふ特殊のものであるから、これを加行變格活用といふ。

加行變格活用に屬する動詞は「來」一つだけである。

口語では終止形が連體形と同じく「くる」となるだけで、他は文語

の活用と同じである。

● 文語の命令形には「よ」を、口語ではこの動詞に限り「い」を添へる。

● 口語では本然形は「よう」に連る。

練習四五 左の——線の動詞は何活用に屬するか。

- 一 ほうたる來い。
- 二 早く來れ。
- 三 早く來ればよいのに。
- 四 早く來てくれればよいのに。
- 五 鳥も來鳴き蝶も來り舞ふ。

練習四六 左の文の——線の語は如何に讀むべきか。

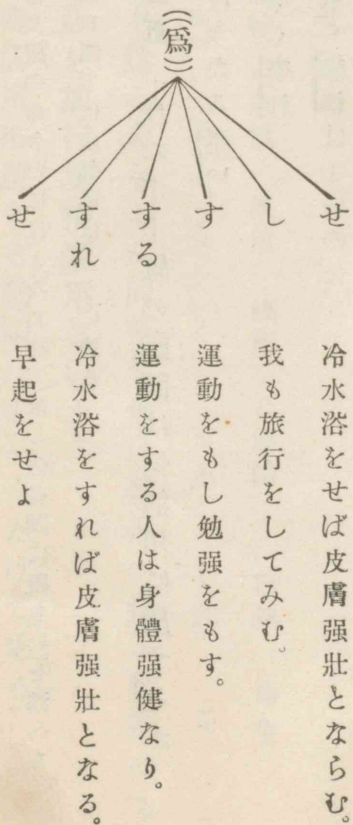
- 一 夏去り秋來る。
- 二 夏が去つて秋が來る。
- 三 我もくと馳せ來る。



- 四 我もくと馳せ来る子供等。
- 五 秋は来ぬ紅葉は宿に散りしきぬ。
- 六 如何にせむ来ぬ夜あまたの時鳥待たじと思へば村雨の空。

### 八 佐行變格活用

【二五】「爲す」といふ動詞は佐行四段活用であるが「爲」といふ動詞は、それと違つて、



のやうに、

### 佐行變格活用

(語幹) 未然 連用 終止 連體 已然 命令  
 (爲) せ し す する すれ せ

と活用し、上二段と下二段とを兼ねたやうな一種特別な活用である。これを佐行變格活用と名づける。

これに屬する動詞は「爲」の他には現代文には用ゐられぬ「おはす」がある。その他、名詞・漢語・洋語等が「す」と複合して動詞となつたもの、即ち

罪す 勉強す 論ず スケツチす

などは皆佐行變格活用をなし、又副詞が「す」と複合して動詞となつたものも同様に佐行變格活用に屬する。

明らかにす 正しくす 全うす 安んず

口語では、この活用は終止が連體と同じく、するとなる。口語活用は語によつて一定せぬが、概して



せし する する すれ せ(よ)い  
 しし する する すれ し(ろ)  
 のいづれかである。

● 文語では命令形に「よ」を添へ、口語では「よい」又は「ろ」を添へる。  
 ● 口語では未然形は「よう」に連る。

【注意】「勉強しよう。警戒しよう。」などは左變の未然形に「よう」の添はつたもので、「どうでせう。行きませう。」の「でせう。ませう」は助動詞である。

練習四七 左の文語動詞を活用させよ。

おはす 講ず 噂す 譯す 散歩す 創作す 西洋化す  
 重んず 詳かにす

練習四八 口語動詞の未然形が「う」に連る活用と、「よう」に連る活用とを擧げよ。

練習四九 左の動詞の文語・口語兩活用を問ふ。

生まる 死ぬ 死す 殺す 生く 生む 生ず

練習五〇 左の文中の動詞を指摘し、その何活用の何形であるかを言へ。

- 一 ならぬ堪忍をせよ。
- 二 善を爲さむとせば勇氣あれ。
- 三 爲る事爲す事皆鶻の嘴と喰ひ違ふ口惜しさ。
- 四 斯うすれば旨く出来る。
- 五 それからどうします。
- 六 なさばなる、なさねばならぬ、なるものを、ならぬといふは、なさぬ故なり。

練習五一 左の文に誤あらば正せ。

- 一 死のふか生きやうか、それが問題だ。
- 二 卑怯な死にやうをしてくれるな。
- 三 さうゆう事もあるうと思ふ。



- 四 一寸見てさようかしら
- 五 隈なく探し求むれども、大塔宮は何處にもおはさず。
- 六 今のは何でしようか。鼠の悪戯であるふと考へますが、

九 形容動詞

【二六】「美しくのやうに」に終る副詞(形容詞から轉じたもの)「明らか」のやうに」に終る副詞、及び「悠々と」のやうに」に終る副詞が動詞「あり」と複合した

- 美しく+あり
- 明らかかなり……………明らかに+あり
- 悠々たり……………悠々と+あり

の如きを形容動詞といつて動詞の一種と見做す。その活用は前に述べたやうに良行變格と同じである。

形容動詞

實際の語尾變化は其變と同じであるが、便宜上、下のやうに記憶するがよい。

即ち形容動詞の活用には「かり」「なり」「たり」の三種類ある。

●「かり」活用の終止形や已然形は現代文では餘り用ゐられない。

(「美しく」の場合には「美し」といふ形容詞の終止形又「美しかれど」の場合にも「美しけれど」と形容詞の已然形が用ゐられるのが普通である。)

●形容動詞「異なり」を「異なれり」「異なりて」「異なりたり」と用ゐてもよい。

【注意】體言の下につく助動詞の「なり」「たり」「即ち」

彼女は女學校の生徒なり  
學生たる者の本分

と形容動詞の語尾の「なり」「たり」とを混同してはならぬ。(第二章四)五(注意參)



照

練習五二 左の形容動詞を活用させよ。

- 多かり                      少かり                      善かり                      遅かり
- 静かなり                      稀なり                      勤勉なり
- 欣然たり                      紛々たり                      滔々たり

練習五三 左の文中に形容動詞あらば拔出せ。

- 一 名聲噴々たり。
- 二 その巧なること殆ど言語に絶す。
- 三 この邊は郊外なれば極めて閑静なり。
- 四 遠からん者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ。
- 五 夢ならば早く覺めよ。
- 六 恨みは友の別れより、更に長きは無かるらん。
- 七 大なる詩人は常にその時とその國との醫師なり。彼は吾等に生

命を齎らせばなり。

口語では

	未然	連用	終止	連體
かり活用	から	かつ		
なり活用	であら	であつ	である	(な)

の如く、極めて不規則で、他は多く文語の活用を轉用する。

練習五四 左の文中に形容動詞あらば拔出せ。

- 一 善かれ悪しかれ引受けた以上は責任を負ひます。
- 二 さつと面白からうと存じます。
- 三 立派な態度でした。
- 四 それには確乎たる信念を要する。
- 五 湖の面は眠つてゐるやうに静かである。
- 六 いつも淋しかった私の家にも今日こそ春が來のだ。



一〇 動詞の活用の識別

【二七】 以上述べたやうに、動詞の活用には、

文語	口語
四段活用 良行變格活用 奈行變格活用	四段活用 (文語四段活用と同じ)
上二段活用 上一段活用	上一段活用 (文語上一段活用と同じ)
下二段活用 下一段活用	下一段活用 (文語下一段活用と同じ)
加行變格活用	加行變格活用 (文語と活用少し異なる)
佐行變格活用	佐行變格活用 (文語と活用少し異なる)

文語は九種、口語は五種の活用の種類がある。變格の動詞及び文語の上一段と下一段とは少數であるから、すべて記憶するとして、これを除いた他のすべての動詞は、四段か上二段か下二段かのいづれかに屬する。或動詞がこの三種のうちどの種類に屬するかを識別するには、ずを添へて見て、その上に來る語尾が「ア段」なら四段、「イ段」なら上二段、「エ段」なら下二段と思へばよい。

「讀ま(ア段)……………ず」

四段活用

「閉ぢ(イ段)……………ず」

上二段活用

「出で(エ段)……………ず」

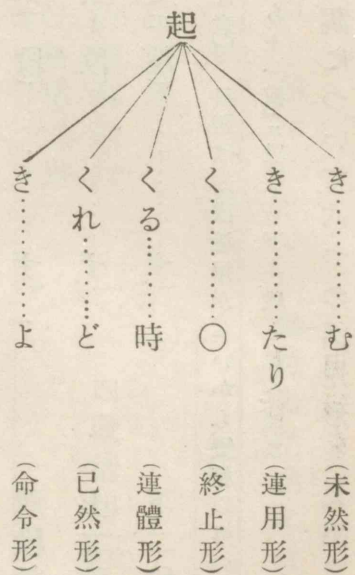
下二段活用

【注意】 口語は二段活用がないから、變格以外のものは、「ア段」なら四段、「イ段」なら上二段、「エ段」なら下二段と思へばよい。

また、或動詞について六つの活用形を見出さうとするには、その動詞に「む」「たり」「〇」「時」「ど」「ども」「よ」をつけて見ると、その上に六つの語



尾が出て来る。即ち、



練習五五 左の文語動詞を活用させよ。

- 見る 見ゆ 聞く 開く 開ゆ 煮る 煮ゆ 報ゆ
- 強ふ 飢う 凍ゆ 湛ふ 率ゐる 暗んず
- 辱うす 重大なり

練習五六 左の口語動詞を活用させよ。

- 見える 聞える 報いる 強ひる 堪へる

復習二

練習五七 左の動詞は二様に活用するが何と何か。

- 絶える 凍える 飢える 用ひる 用ゐる
- ぶつかる ぶつける 感違ひする
- 進む 退く 折る 破る 入る 恨む 沈む
- 開く 立つ 忍ぶ 死ぬ

練習五八 次の文語動詞の活用に誤あらば正せ。

- 争 は ひ う う え え
- 替 へ へ ゆ ゆる ゆれ へ
- 報 ひ ひ ふ ふる ふれ ひ
- 倒 れ れ れ れ れ れ れ
- 据 え え ゆ ゆる ゆれ え



存 ぜ ぜ ず ずる ずれ ぜ  
 任 せ し せる する すれ せ  
 練習五九 左の口語動詞の活用に誤あらば正せ。

有 ら り る る る れ  
 離 れ れ れる れる れ れ  
 射 ら り る る れ れ  
 絶 へ へ へる へる へれ へ  
 傳 へ へ へる へる へれ へ

練習六〇 左の動詞を用ゐて短文を作り、然る後に活用の誤が

ないかを検べよ。

植 植う 敷ふ 榮ゆ ほの見ゆ 堪ふ  
 照る 射る

【注意】 作文の時でも、作る時は文法に頓着せず、思ふままに筆にまかせて書き、

後で讀みかへす時に誤字や文法の誤を正すやうにすれば、文もすらくと書  
 け文法上の誤もなくなる。

練習六一 左の文中の動詞を指摘し、その何活用の何形なるか  
 を言へ。

一 今や八千萬の國民大八洲の民草は、紫宸殿の高御座を遙拜して、  
 天皇陛下萬歳を高唱しつゝあり。轟く百一發の皇禮砲響き渡る  
 汽笛、撞き鳴らす梵鐘、全日本は、この日午後三時、日本國民のみが知  
 る最大の歡喜に搖り動きたり。

二 兩國の占店の前にて子供等風を揚げながら、この占はあたら  
 ぬ。下手な先生やあい。と惡たいをいふ。占者腹を立てて、こいつ  
 らは毎日店先で邪魔をする上に憎い雜言。うぬらは一體どこの  
 餓鬼共だ。子供等、あててみな。

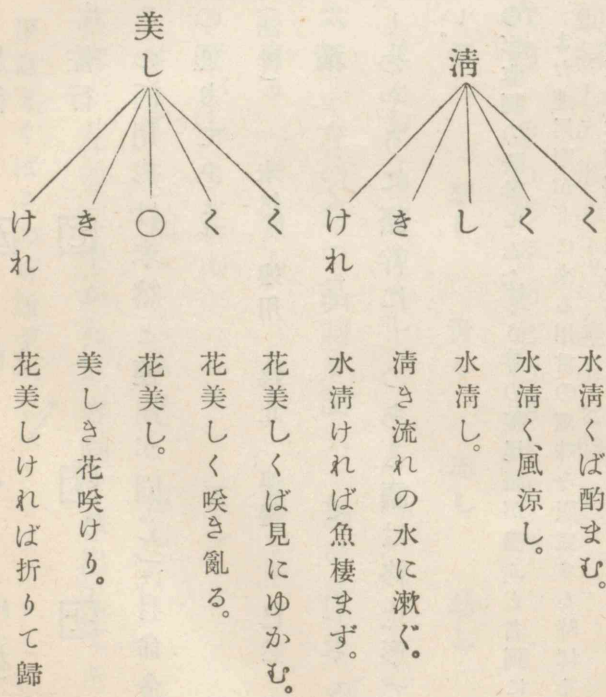
練習六二 左の文に誤あらば正せ。



表でジョンが吠えています。暫くすると、ワツとゆふ泣き聲が聞へました。又かと思ひながら、走り出て見ると、案の定、ジョンが近所の子供の著物の裾をくはえて放さないのです。私が「こら」と怒鳴たので、ジョンは飛ぶやうに逃げて行きました。家へはゐると「又かえ」と母が問いました。そのうちにもう表からまたジョンの聲が聞へて参りました。私は「裏に鎖で繋ぎましようか」と母に言いながら又表へ出て、逃げまはるジョンを捕えて裏に行き、鎖で木の根元に縛りつけました。すると、ジョンはこはごは私の顔を見て尾を振りはじめました。何だか可愛さうなので、頭を撫でて、「ジョンや、これからおとなしくおしよ。今日だけは赦して上げるから。」と言ひながら鎖を解いてやりました。

一 一 形容詞の活用及び活用形

【二八】 形容詞は體言の上や下についてこれを形容する語で、やはり用言である。その活用は、



の如く、動詞が同行に活用するのと違ひ、加佐二行に跨つてゐる。



そして、その活用形は未然と連用が同じで、且命令形は缺けてゐる。即ち左の通りである。

加行	か	き	く	け(れ)	こ
佐行	さ	し	す	せ	そ
(語幹)	未然	連用	終止	連體	已然
					命令
清	く	く	し	き	けれ
					○

但し、「美し」のやうに語幹に「し」のある語は、終止形で「美しし」と「し」を重ねない。

便宜上「清し」「堅し」などをく活用「美し」「樂し」などをしく活用と名づけて區別することもある。

- 形容詞の語幹に「み」「げ」「さ」等の接尾語が添ふと名詞になる。(第四章九参照)
- また連用形が下に來る用言の意味を限定する時はそのまゝ副詞となる。(第三章六副詞に轉成したもの参照)
- 良行變格の動詞「あり」と複合して形容動詞となるのも連用形からである。(第九章二六参照)

● 「静けし」「露けし」「さやけし」等の形容詞は已然形が用ゐられない。

練習六三 (イ)形容詞と動詞との形の上の差異、(ロ)形容詞と形容動詞との形の上の差異を問ふ。

練習六四 左の形容詞を活用させよ。

善し 悪し 青し 赤し 幼し 賢し  
 長々し 甲斐々々し

練習六五 左の語の品詞を問ふ。(動詞は活用の種類をも言へ。)

有り 無し 久し 久しかり 騒ぐ  
 騒がし 正し 正す 正しくす 甘し  
 甘んず 甘み 涼む 涼し 涼しさ

練習六六 左の文中から形容詞を抜出してその活用を言へ。

- 一 用意よくばその旨通ずべし。
- 二 喜ばしさ譬へんに物なし。



- 三 罪なき者は恐れず。恐るゝ者は疚しければなり。
- 四 三度たく飯さへこはしやはらかし、思ふまゝにはならぬ世の中。
- 五 手のわるき人の憚らず文書き散らすは宜し。見苦しとて人に書かするはうるさし。
- 六 日本に山は多けれども、神州にふさはしきは富士の外に求むべからず。

【二九】 口語では、形容詞は

(語幹)	未然	連用	終止	連體	已然	命令
清	く	く(う)	い	い	けれ	○
美し	く	く(う)	い	い	けれ	○

と活用し、文語の「し」が「い」となる(連用の「く」も時に「う」となる)。即ち未然連用が同じである上に、終止連體の區別がない。

●文語では語幹に「し」を含む語と含まない語とは活用が違ふが、口語では全く

違ひがない。

練習六七 形容詞の文語と口語との活用を比較してその異同を検べよ。

練習六八 左の口語の形容詞を活用させよ。

- めでたい 善い 悪い 甲斐くしい
- 苦しい 固苦しい うるさい

練習六九 左の文中から形容詞を抜出してその活用形をいへ。

- 一 食物の話の出る一座は親しいものだ。
- 二 昨夜は恐しい夢を見た。
- 三 若い詩人は軽くうなづいた。
- 四 おまへも嘸嬉しからう。私も嬉しくてならないのよ。
- 五 それでよければ結構です。

練習七〇 左の文中に誤あらば正せ。



- 一 みんなおいしひおいしひと言つて食べました。
- 二 彼はだまつて澁い顔をしてゐた。
- 三 貧ししと聞きて同情の念を禁じ得ざりき。
- 四 ただくそのみが悔やしふござりまする。
- 五 私はほんとに羨ましゆうございました。
- 六 雪達磨が黒ひ目玉をむき出してゐる前を白い小犬が駆け廻つてゐる。

一二 音便

音便

【三〇】 動詞の連用形から「たりた」に連る時、その語尾が發音の便宜上他の音に轉ずることがある。これを動詞の音便といひ、原音の假名を轉音に書きかへねばならぬ。動詞の音便には左の四種がある。

【注意】 動詞の音便は四段・良變・奈變の時に起る。口語では音便の方が普通である。(第六章二三二の附記参照)

一 い音便 き ぎ の音が い に轉ずるもの。

咲きて 咲いて

泳ぎて 泳いで

● が行の動詞がい音便を起す時には、「たりた」が濁音になる。

● 指して「が指いて」となるやうに、稀には「しも亦い音便を起すことがある。

【注意】 泳ひだ 泳るだ

など書くのは誤である。その理由はよくわかるであらう。

二 う音便 ひ の音が うに轉ずるもの。

問ひて 問うて

【注意】 問ふて

と書くのが誤であることは、活用形の上から考へてもわかる。

い音便

う音便



練習七一 左の文中の動詞の音便を指摘して、その原音を示せ。

- 一 先生がこちらを向いていらつしやる。
- 二 太祖崩ず。太宗繼いで立つ。
- 三 俄に風が吹いて來た。
- 四 少し痛が薄らいだので床を離れてみた。
- 五 母校に舊師を訪うて昔日を偲ぶ。

練習七二 左の文中の誤を正して、その理由を述べよ。

- 一 その話を聞いてほんとうに驚ひた。
- 二 掌中の珠を失ふたる心地して茫然たるばかりなり。
- 三 天を仰ひて長嘆すること久し。
- 四 負ふた子に髪なぶらるゝ暑さ哉。
- 五 さういう事情なら、此方にも少し考へがある。
- 六 揃ふた揃ふた、踊り子が揃ふた。

撥音便

三 撥音便 に び み の音が 撥音(ん)になるもの。

死にて 死んで  
 飛びて 飛んで  
 飲みて 飲んで

●右のやうに奈行ば行、麻行の動詞が撥音便を起す時は、「て」「た」等は濁音になる。即ち撥音便の時は大抵濁音になる。

【注意】「死ぬ<sup>△</sup>で、飲む<sup>△</sup>で」などは誤である。

四 促音便 ち ひ り の音が促音(っ)になるもの。

勝ちて 勝つて  
 買ひて 買つて  
 ありて あつて

●「買ひて」「従ひて」の如く波行四段活用時は、「う音便」ともなる。

練習七三 左の文中の動詞の音便を指摘して、その原音を示せ。



- 一 當つて碎ける。
- 二 ころんでも笑うてばかり雛かな。
- 三 もう二三日待つたら様子がわからう。
- 四 近所の飼犬が子を生んだらしい。
- 五 敬つて白す。
- 六 飛んだり跳ねたり躍つたり。

練習七四

左の文中の誤を正し、○印の箇處には適當の假名を埋めよ。

- 一 孫の面倒を見てやりながら静かに餘生を樂しむでをります。
- 二 勝て兜の緒を締めよ。
- 三 姉と妹が並むて行く。
- 四 これは伯母さんから貰○た朝顔の種子です。
- 五 その溪に沿ふて二三町ばかり歩ひて行つた。

六 澄み渡○た空には星が二つ三つほゝ笑○でいる。

【三一】

形容詞にも音便がある。い音便とう音便の二種である。口語では音便の方が普通である。

(い音便) 悲しき哉 悲しい哉

(う音便) 寒くなつた 寒うなつた

又形容詞の連用形から轉成した副詞が佐變の「す」と複合する際、その語尾「く」が、う音便又は撥音便を起すことがある。

(う音便) 全くす 全うす

(撥音便) 安くす 安んず

練習七五

左の文中の形容詞を指摘せよ。

- 一 數多い史蹟がないとしても、京都は好い郊外を持つた首府である。奈良の舊都と比べると規模は稍小さいけれども、感じの複雑なのは却つて彼に優つてゐると言つても誤はない。



- 二 島山關に著きあたり 漁火光淡し。
- 寄る波岸に緩うして、 浦風軽く沙吹く。
- 見よ、夜の海。 見よ、夜の海。

練習七六 左の文中に誤あらば正せ。

- 一 小事を輕むずる勿れ。
- 二 大いに意を強ふするに足れり。
- 三 首尾よふ兄弟が仇祐經を討たと聞ひた時の母の心は如何であつたらう。
- 四 腹はへつてもひもじふなる。
- 五 立たり坐たり少しもおちつかぬ。

練習七七 左の文中の誤れる方の假名を消せ。

- 一 ありがとふ存じます。
- 二 謹んで新年を御祝ひ申上げます。

- 三 安んじて可なり。
- 四 朝に星を戴いて出で、夕に月を踏んで歸る。
- 五 文明人は公德心に富んでをる筈だ。
- 六 何處かで逢ふた事のあるやうな人だ。
- 七 一見たやすく思われる事が、却つてむづかしうございます。

●なほ名詞にも、音便で「い、う、ん」などになつたものがある。

つきたち(朔日) ついたち  
あきびと(商人) あきうど あきんど  
これらは本の語を考へればつゝるたち「あきふど」など書くのが誤であることがわかるであらう。

復習 三

練習七八 左の文中の動詞及び形容詞を指摘して、その活用形



を言へ。

あはれ餅よ。喰べて旨く、搗いて音こそ面白けれ。一人にて搗くは淋し。二人なるも三人なるも四人なるも、多勢なるほど勢よくて盛んなり。音頭取りて、ベツタンコくく、見る間に幾白も搗かれて、熨されて、四角な白き座蒲團のやうなおいしい餅は幾枚も出来上りたり。

お供へのいびつなるは福助の頭よりも可笑しく、おかめの女中圓めやう下手なれども、今宵は小言いふものもなし。

練習七九 左の文中の誤を指摘して、その理由を述べよ。

校庭の芝生には朝露がしつとりとまだ乾かずにダイヤのやうに美しく光っている。いつもより早ひのか、お友達は誰も姿を見せない。私は椎の木の下で、自分の髪の毛をいぢりながら、幾度もそれを結むだりほどひたりしてゐた。

一三 助動詞の種類

【三二】 助動詞は單獨には用ゐられず、主に動詞に連つてその作用を助けるが、稀には體言(たり、なり)等の場合助詞(ごとし)にも結びつく。又助動詞が幾つもあることもある。

助動詞には次のやうな種類がある。

一 受身

犬(が)子供に打たる文語 れる口語  
田舎者に道を尋ねらる られる

●受身の形が可能や敬語の意味に轉用せられることもある。

二 使役

本を生徒に讀ます文語 せる口語  
過を改めさせます させます  
視察に赴かしむ

●これも敬語に轉用せられることがある。



三 推量

花(が)散る 文語  
 花(が)散りけむ 口語  
 花(が)散るらし 口語  
 (散つ) 口語  
 ただらう 口語  
 たでせう 口語  
 ただらう 口語  
 たでせう 口語  
 らしい 口語

●古文には「散るめり」「行かまし」のやうに「めり(ラシイ、トミエル)」「まし(ダラウ)」がある。

●「べし」は可能命令にも用ゐられる。又良變の「あり」と結合して「べからず」「べからん(約りて)」「べけん」ともなる等といふこともある。

●未來の助動詞「む」口語の「う」「よう」を推量に轉用することもある。

四 打消

誰も知ら 文語  
 誰も知らじ 口語  
 誰も知るまじ 口語  
 誰も知るまい 口語  
 (ナイダラウ)

●「じ」「まじ」は推量の意を兼ねてゐる。

五 願望

明日の競技に勝ちたし 文語  
 勝ちたい 口語

●「たし」は良變と結合して「勝ちたからむ」などともなる。

六 指定

我等は學生 文語  
 我等は學生なり 口語  
 我等は學生だ 口語  
 我等は學生です 口語

●これはおもに體言の下につく助動詞である。

【注意】形容動詞の語尾と混同してはならぬ。(第九章二六【注意参照】)

練習八〇 次の——線の語の品詞を問ふ。

- 一 忠敬は伊能氏の養嗣子となり、自ら抑へて平々凡々の人となり、一意専心、養家(やうか)を起さんことを期したる人なり。
- 二 ほんとに綺麗だ。實に綺麗な花だ。
- 三 現に高等女學校長たり。
- 四 満座肅然たり。



七 時

花(が)咲き  
 花(が)咲けり  
 花(が)咲かむ

つ | ぬ | たり | き | けり | けり

文語

口語

咲いた

う |

●現代文では「つ」「ぬ」「たり」「き」「けり」「り」は過去を時には「たり」「り」が現在完了の意味に用ゐられる。「む」は未来を示すに用ゐられる。

八 比況

月日は流るるが  
 光陰は矢の  
 雁が音遠く聞ゆなり(文語)  
 旅にまさりて苦しかりけり(文語)

如し | やう | だ | である | です

文語

口語

九 咏嘆

●咏嘆の助動詞は多く古文に用ゐられたもので指定や時の助動詞と同形である。これを區別するには文全體の意味の上から考へるより外はない。

●口語には咏嘆の助動詞はなくなつてゐる。

一〇 可能

讀まば讀まる | 讀めば讀まれる

よく酷熱にも堪へらる | 漁火點々數ふべし

文語

口語

●口語の「れる」は多く上の動詞の語尾と結合して「讀まれるが讀める」といふやうに用ゐられる。

●可能は形は受身の「る」「らる」「推量の「べし」と全く同じである。

一一 敬語

御手をあげて打た | 慇懃に道を尋ね

文語

口語

受身及び使役の轉じたものである。



- 行幸あらせらるのやうに敬語を重ねて用ゐることが多い。
  - 動詞の「給ふ」を敬語の助動詞として用ゐることもある。
- 行き給ふ　　行かせ給ふ
- 口語では動詞から来た「なさる、あそばす、くださる」等を敬語の助動詞に用ゐる。又丁寧にいふ時は「ます」を用ゐる。

一四 文語助動詞の活用及び種類

【三三】 助動詞は動詞・形容詞のやうに活用する。今、文語助動詞の活用を掲げ、併せて他の品詞との接續を示さう。

一 動詞型活用の助動詞

敬可受	種類	活用
敬語	未然	られ
可身	連用	られ
受能	終止	る
	連體	る
	已然	る
	命令	れ
	接續	れ

□印は現今用ゐられぬもの、○印は活用形のないもの。

使役	敬語	指定	時	推量	咏嘆
せ	さ	な	た	○	○
せ	め	ら	た	○	○
す	さ	な	たり	○	○
す	む	り	たり	○	○
する	さ	な	たり	○	○
する	む	る	る	○	○
すれ	さ	な	た	○	○
すれ	む	れ	た	○	○
せ	さ	な	た	○	○
せ	め	れ	た	○	○

一四 文語助動詞の活用及び種類



二 形容詞型活用の助動詞

種類	活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
推量		べく	べく	べし	べき	べけれ	○	各動詞の終止形に其變は連體形に
打消		まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○	右に同じ
比況		ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	○	用言の連體形に「又は助詞」が「の」の下に
願望		たく	たく	たし	たき	たけれ	○	各動詞の連用形に

【注意】形容詞に連る助動詞は「はり」と「ごとし」だけである。

三 特殊の活用をなす助動詞(これは特に注意してその語形變化を記憶せよ)

種類	活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
----	----	----	----	----	----	----	----	----

打消	時	推量
○ ず	○ せ	○ ○ ○ ませ
○ ず	○ ○	○ ○ ○ ○
じ ず	き む	け ら ら まし む む し
じ ぬ	し む	け む ら ら まし む む し
じ ね	し め	け め ら ら かし む む し
○ ○	○ ○	○ ○ ○ ○
各動詞の未然形に	各動詞の未然形に 各動詞の連用形に但し加外例・佐變は除	各動詞の終止形に 但し其變は連體形に 各動詞の連用形に

【注意】助動詞(特に動詞型のもの)が他の助動詞と連るのは、大體動詞の接續に準じて考へればよい。

●助動詞(き)の活用が加變に連る場合は、未然來・連用來(兩形)に接する。但し「き」には接續せぬ。(故に「きき」「きき等」は誤)



● 佐變に連る場合は「きは連用爲」に「し」「しか」は未然爲に連る。「故にせきしし」  
しかなどは誤

● 「ず」「べし」「たし」等が動詞ありと結合したものは形容動詞のやうに活用する。

べから べかり べかり べかる べかれ べかれ

たから たかり たかり たかる 〇 〇

練習八一 次の文中の助動詞を指摘せよ。

- 一 言はぬは言ふにまさる。
- 二 後人の渴仰長く止まざるべし。
- 三 好かるゝと嫌はるゝとは心がらなり。
- 四 さすが棄つるにも棄てられず。幼子をかき抱きて聲を限りに歎かせ給ふぞいたはしき。
- 五 時鳥なきつる方を眺むればただ有明の月ぞ残れる。

練習八二 次の歌の——線の助動詞は何種のものか。

- 一 秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる。
- 二 春來ぬと人はいへども鶯のなかぬ限りはあらじとぞ思ふ。

練習八三 次の文語助動詞の求められた活用形を示せ。

- イ 「ず」の連用形
- ロ 「ず」の未然形・連用形
- ハ 「さ」の已然形
- ニ 「ぬ」の未然形・連體形
- ホ 「む」の連體形・已然形

練習八四 次の一對の助動詞の意味の相違を説明し、且各、を含む文を示せ。

- イ 「まし」と「まじ」
- ロ 「じ」と「ず」
- ハ 「らむ」と「けむ」



一五 誤り易き助動詞の接續

【三四】 助動詞と他の用言との接續は前表に示す通りであるが、實際に當つては誤用せられる場合が特に文語の場合に多い。左にその著しいものを挙げよう。

【三五】 らる さす が佐變に連るのは未然形からであるから、「罪せらる」「賣買せさす」といふべきを現代文では「罪さる」「賣買さす」と「せ」を略して用ゐる習慣あるものは許されてゐる。

【三六】 しむ も未然形から連るから「罪せしむ」「賣買せしむ」等は正しいが「見せしむ」「來さしむ」などは、誤で「見しむ」「來しむ」とすべきである。但し「得しむ」だけは「得せしむ」と用ゐてもよい。

練習八五 次の文に誤あらば正せ。

一 直ちに警察署に事情を訴へさせたり。

二 直ちに警察署に事情を訴へさしめたり。

三 最優等者にのみ褒賞を得せしむ。

四 素直なる人は萬人に愛さる。

練習八六 次の動詞に受身及び使役の助動詞を附してはたらかせよ。

朽つ 居る 居る 重ぬ 重んず

【三七】 り は四段佐變・奈變に限り連る。下二段の連用形からつづけてはならぬ。

練習八七 次の文に誤あらば正せ。

一 聴衆に多大の感動を與へり。

二 見る影もなく荒れ果てり。

三 年老いて氣力もいたく衰へるが如し。

四 最後の五分間に於てあはれ佛軍は敗れり。







- 二 それにては成功とは言はれまじ。
- 三 必ず子々孫々まで傳ふるべきものなり。
- 四 恐らくは急には成功するまじ。
- 五 此の度はさすがの彼も懲りたるらし。
- 六 故郷を雲や隔つらん。

【四〇】 じ ざり 連用形からなど續けては誤である。

練習九一 左の文に誤あらば正せ。

- 一 新工夫を案じざるべからず。
- 二 いかにかに巧に扮すともよも彼人には似るじ。
- 三 誘惑に捕へられざれ。

【四一】 なり (指定咏嘆) ごとし 指定の「なり」は連體咏嘆の「なり」は終止良變は連體から連るから、

聲するなり(指定) 聲すなり(咏嘆)

と違ふが、連體と終止と同じ動詞では、全文の意味できめるより他ない。但し作文の時に、指定の「なり」を終止に連ねぬやう注意するがよい。「ごとしも」連體に連る。終止に連ねてはならぬ。助詞「が」が間にはいつても同じである。

練習九二 次の文の誤を正せ。

- 一 若し容易なりと考ふならば恐らくは過たん。
- 二 將來必ず社會に有數の地歩を占むなるべし。
- 三 一言一句悉く溢る如き熱誠に満ちたるものなりき。
- 四 泣くが如く怨むが如く將た訴ふが如し。

練習九三 左の文中に誤あらば正して、その理由を述べよ。

- 一 本學園の創設せしられしは大正八年なりし。
- 二 懇に禮を述べり。
- 三 與一に命じて扇の的を射せしむ。







打	消	○	○	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	○
時	たら	○	た	た	○	○	○
指	定	たら	だ	○	○	○	○
(注) 體言のみに 又は助詞の 下に							

● 時の「た」は撥音便の時は濁音になる。指定の「で」「だ」とは別である。

● 指定の「だ」の代に「である」「です」なども用ゐられる。「です」の活用は、

てせ　　てし　　です　　○　　○　　○　　○

● 「ます」は丁寧にいふ時につける助動詞で従つて敬語の助動詞につくことが多い。接続は連用形からである。

これではありません

御出でなさいませ

御覽下さいませ

その活用は

ませ　　まし　　(ます　　ます　　ますれ　　ませ)

● 「う」「よう」「時」「まい」「打消」「だらう」「推量」は終止形だけで他の活用形が無い。

● 右の「う」及び「よう」は文語助動詞の「むん」に「又」「まい」は「まじ」に相應する助動詞である。

練習九四

「う」「よう」「まい」「だらう」の各助動詞が接続するのは動詞のいづれの活用形からであるかを例に就いて考へてみよう。

練習九五

口語助動詞の活用表に準じて、次の動詞に接続し得る助動詞を附して、活用を練習せよ。

悔いる　　植ゑる　　得る　　有る　　死ぬ

練習九六

次の文中の助動詞を指摘せよ。

- 一 さあ雨が霽れた。そろ／＼出かけよう。
- 二 日が沈んだと思ふと急に何だか寒くなった。
- 三 時間を守り、時を大切にいたしませう。



- 四 ない袖は振りれない
- 五 御氣に召さない筈はない。
- 六 空瓶折箱井などを窓から投げられると線路工夫が怪我をしますから、腰掛の下にお置き下さい。

練習九七 次の文に誤あらば正し、且理由を述べよ。

- 一 きつと叱らるゝだらふと心配した。
- 二 來年のことをゆうと鬼が笑うてしようか。
- 三 こんな面白ひ書物はめつたに無かろうと思ひますが。
- 四 いや、知らさなくとも苦情は言つて來るまゝと存じます。
- 五 今に首を斬らるだらうと見物は固唾をのんで觀てゐる。
- 六 私達三年級生徒は二つの旅館に分宿させられました。

一七 活用連語

【四三】 動詞だけでは單純な現在の動作を示すに過ぎないが、これに種々な助動詞が添うて、それぞれ複雑な意味を現すのである。例へば、

書く

とだけでは單なる現在の動作をあらはすのであるが、これに受身や使役の助動詞が添ふと、

書かる

書かれて

書かす

書かすれど

など、それぞれの意味が現れ、更にこれらの二つを重ねて、

書かせる

書かせるれば

とすれば使役の受身、即ち他からどうさせられるとの意味を現す。なほこれが又可能敬語の意味をも現すことは前にも述べた。

練習九八 助動詞「らる」を含んだ(イ)受身の文と、(ロ)敬語體の文と



を作れ。

【四四】 更に、前例の文の否定を作るには、打消の助動詞をその下につければよい。

書か<sup>し</sup>め<sup>せ</sup>られ<sup>ず</sup> 書か<sup>し</sup>め<sup>せ</sup>られ<sup>ざ</sup>ら<sup>ば</sup>

●二重に打消の助動詞を用ゐると肯定となる。

多から<sup>ず</sup>とせ<sup>ず</sup>。多くな<sup>い</sup>ては<sup>な</sup>い。

約束は守ら<sup>ざる</sup>べから<sup>ず</sup>。約束は守ら<sup>ね</sup>ば<sup>なら</sup>ぬ。

練習九九 次の文に誤あらば正せ。

一 國民には之を導くべき理想の光無からざるべからず。

= 心誠に之を求めば成業の道豈無からざらんや。

【四五】 又時の助動詞が加はると、

書か<sup>し</sup>め<sup>せ</sup>られ<sup>ざ</sup>ら<sup>む</sup>

*あつた*

書か<sup>し</sup>め<sup>せ</sup>られ<sup>ざ</sup>り<sup>き</sup>

書か<sup>し</sup>め<sup>せ</sup>られ<sup>ざ</sup>り<sup>け</sup>る<sup>が</sup>

【四六】 推量の助動詞が加はると推量の意味が現れる。

書か<sup>し</sup>め<sup>せ</sup>られ<sup>ざ</sup>る<sup>べ</sup>し

書か<sup>し</sup>め<sup>せ</sup>られ<sup>ざ</sup>り<sup>し</sup>なる<sup>べ</sup>し

書か<sup>し</sup>め<sup>せ</sup>られ<sup>ざ</sup>り<sup>け</sup>む

【四七】 又必要に應じ、同種又は異種の助動詞が連つて、いろく

細かな意味を區別して表すことが出来る。

書か<sup>し</sup>め<sup>せ</sup>られ<sup>ざ</sup>る<sup>べ</sup>から<sup>ず</sup>

書か<sup>し</sup>め<sup>せ</sup>られ<sup>ざ</sup>る<sup>べ</sup>から<sup>ざ</sup>り<sup>き</sup>



書か し め せ ら れ ぎ る べ か ら ざ り し が こ と し  
 書か し め せ ら れ ぎ る べ か ら ざ り し な ら む  
なげはふらふらつた時だ  
おけしはさうもつたあつた

練習一〇〇 右の「四五」以下の文例を口語に改めて見よ。

練習一〇一 次の文中の助動詞を指摘せよ。

- 一 父父たらざれども子は子たらざるべからず。
- 二 甞に平家一門の柱石たりしのみにあらず、又實に世道の儀表たりしなり。
- 三 さぞ逢ひたかりしならん。
- 四 さぞ逢ひたかつたであらう。
- 五 右の時間内は踏切番人を附せざるにより注意せらるべし。
- 六 是非實行せねばならぬことに定つてゐる。
- 七 豈鑑みざるべけんや。

活用連語

【四八】 今まで示した例でわかるやうに、助動詞は動詞或は他の助動詞に結びつくが、その結びつき方には自ら一定の順序がある。かうした種々の助動詞の連結を活用連語と名づける。

復習五

練習一〇二 次の文中の用言を指摘し、その品詞を示し、且各、を  
活用させよ。

鎌倉時代は極めて想像力の缺乏せし時代なりき。この時代の小説に見るに足るべきものなし。又この時代とても、作品の数は必ずしも尠からざりしならむも、今に傳はれるもの殆ど稀なり。蓋し、その文學としての價値に乏しかりしが爲に、その生命も短く、おのづから絶滅するに至れるものなるべし。

練習一〇三 左の文中の用言を指摘して、その活用形を言へ。



- 一 思へば悲し昨日まで 真先かけて突進し敵をさんざん懲らしたる 勇士は此處に眠れるか。
- 二 先頃イギリスの總選舉があつた時、動物園の龜が大演説をはじめました。しかしそれは代議士になりたい爲ではなくてもつと御飯をくれといふ、食ひしんぼうの演説でありました。

練習一〇四 左の古文を口語になほせ。

- 一 御氣色殊にうるはしう、手づから御酒酌ませて庭前の花を飽かず眺めさす。
  - 二 行かば行くべかりしを、いかが思ひけむ留まりてけり。
  - 三 父母の旅なる我を思ふらむ、待つらむさまのおもかげに見ゆ。
  - 四 龍田川紅葉亂れて流るめり、渡らば錦中や断えなむ。
- 主ある家には、すずるなる人心のまゝに入りくることなし。心に主あらましかば、胸の中にそこばくの事は入り來らざらまし。

一八 助詞 (一)

【四九】 助動詞と助詞とは形がよく似てゐる。いづれも單獨に用ゐられないことは同じであるが、助動詞には活用があり、助詞にはない。

助詞は所謂「テニヲハ」で、日本語特有のものであつて、その役目はさまざまである。次に主なる助詞を擧げて見よう。

- の あの人 試験の始まる日
- が 君が代 雨が降る
- は 花は櫻木

●「わが罪をば赦せ」のやうに、をの下に來る時は「ば」となる。

- つ 天つ風 (のと同じ意味である)
- を 文法を學ぶ 友の歸るを送る

□印は古文に用ゐられたものを示す。







順説の接続

ば 苦あれば樂あり 急がばまはれ

ど 目的は善けれど手段悪し

ども 天氣晴朗なれども浪高し

とも 勝るとも劣るまい

も 我も人なり 三人もあれば十分だ

つつながら 眺めつつ行かん 散歩しながら話さう

ぞ 知る人ぞ知る

こそ 我こそ第一なれ あなたこそお書きなさい

なむ これなむ都鳥といふ

●「ぞ」「こそ」「なむ」は上の體言の意味を強めるに用ゐられる。

し 無きにしもあらず 時しもある

【注意】「し」も意味を強めるに用ゐる。時の助動詞「し」と混じてはならぬ。

生きとし生けるもの ありし昔

かし 昔の人はかく風流なりしぞかし 見よかし

●「かし」も意味を強める助詞。

のみ(だけ) 僅に三人のみ それだけは確です

ばかり 氣も狂はんばかり 約十日ばかり

ぐらゐ それぐらゐの事 二三十ぐらゐ

ほど 思へば思ふほど腹が立つ 山ほどの仕事

●口語では「のみ」の代に「ばかり」「だけ」を用ゐるのが普通である。「ぐらゐ」「ほど」も主に口語に用ゐられる。

だに 犬にだに如かざるべけんや

すら 犬すら恩を知る 況や人間に於てをや

さへ 雷さへ鳴りはためきて愈恐ろし

●「だに」「すら」は比較して軽い方を擧げる時、「さへ」は更に物の加はる意を現す時に用ゐる助詞である。故に、



雨降り風だにすら吹く 一點の曇りさへなし

などは誤である。但し口語では「さへ」を文語の「だに」「すら」の代に用ゐる。又「まで」を文語の「さへ」の代に用ゐる。

猫までが泣いてゐる

【五〇】 右に示した助詞は、一つ／＼の意味や役目は同じではないが、體言や用言に添うて上下の關係を明らかにしたり、語句を接續させたりしてゐることがわかるであらう。

練習一〇五 左の文中の助詞を指摘せよ。

- 一 甘酒進上、こゝまで御出で。
- 二 針ほどの事を棒ぐらゐに言ふ。
- 三 これだけあれば澤山ですと申しました。
- 四 金はすぐれたれども、鐵の益多きにしかず。
- 五 げに聞くだに涙の種ぞかし。

六 君が代 千代に八千代にさされ石の巖となりて苔のむすまで。

練習一〇六 左の文中の——線の語は助動詞か助詞か。

- 一 人知れず西の門より落ちてけり。
- 二 母上懐かしやと思ひし夜もありき。
- 三 富士の高嶺に雪は降りつゝい。
- 四 古事記はいつ頃出来た本で何が書いてあるか、説明しよう。
- 五 我さへも一斗の餅は搗かぬのに、棚で鼠はごときにけり。

一九 助詞 (二)

【五一】 なほ、特に明らかな意味を表すものを舉げて見ると、疑問の意味を表すもの。

か 雲か霞かはた雪か これは何ですか  
 や 希望の者ありや否や







世の中は常にもがもな

また感動の意味を示す助詞がある。

や あな嬉しや 壯なる哉言や

よ 建武の昔かとよ この花の美しさよ

か あゝ天なるか命なるか (現代文では餘り用ゐぬ。)

●又古文には「かも」もある。

三笠の山に出でし月かも

雲路まどひて行方知らずも

かな 悲しいかな

を 昨日今日とは思はざりしを

ね つまらないね

さ さうさ

【五二】 右の如く、形は同じでも役目の違ふ助詞がいろいろある

から注意すべきである。又助詞を數語重ね用ゐたのも多い。前にも出てゐるが二三を擧げると、

これには深い仔細がある。

この度こそは信玄が坊主首を獲め。

その夜宿りを求めし僧は我なるぞや。

誰にか問はん。

智にして且仁なりといふべし。

我が校の選手として出發した。

朝廷正成をして賊を防がしむ。

●「にして」として、ををして等は複合した一助詞と見做してよい

練習一〇七 左の文に誤あらば、その理由を述べて訂正せよ。

一 電車へ乗りて行くべし。

二 あんまり恐ろしゆので、聲さへも出なる。



- 三 一文字をだに知らず。
- 四 雪だに生憎に降り出でて寒氣いよ／＼加わりぬ。
- 五 正しくあれま。

練習一〇八 次の——線の助詞は何の意味を表す助詞か。

- 一 誰か知らん萬里遠征の情。
- 二 故郷の人に見せばや。
- 三 長くもがなと思ひけるかな。
- 四 あるじなしとて春な忘れそ。
- 五 いもうとと上野の山へ来て見れば、大勢の人が遊んでゐたわ。
- 六 つとめよやつゝしめよやと残し置く老のくり言千年忘るな。

二〇 助詞の接續

【五三】 助詞は今までの例でもわかるやうに、體言にも用言にも

連る。體言との連結は誤る恐れがない。それ故、用言との接續で誤りやすいのを挙げよう。

●體言につくべきものが、その體言が略せられてゐる爲、直接用言無論連體形に續くことがある。

梅は白きがめでたし。

よいといふまで黙つてをれ。

と 用言の終止形をうけるのが正しい。

一時休戦状態にありといふ。

答案は簡明なるをよしとす。

しかし現代文では連體形を受ける習慣のあるものは許されてゐる。

嘲弄せらるゝと思ひて

萬人皆其の徳を稱へけるとぞ。



終日業務を取扱はしむるといふ。

●「といふ」がつまつて「てふ」ともなる。體言の時も同じである。

夢てふものはかなさよ。

西方淨土にありてふ無熱池もかくやとばかり

●又「といふ」の代に「なる」を用ゐる習慣のあるものも許されてゐる。

所謂哺乳動物なるもの

顔回なる者あり。

ば 未然形からと已然形からと連る。文語の時は特に紛

れぬやうにせねばならぬ。

花散らば(未然)

花ガ散(ツ)タラ(ル)

花散れば(已然)

花ガ散(ル)ト(レ)

花散りなば(未然)

花ガ散ツテシマツタラ

花散りぬれば(已然)

花ガ散ツ(タ)カラ(フ)デ(テ)シマフ(ト)

花散りたりせば(未然)

花ガ散ツテシマツタトスレバ

花散りたりしかば(已然)

花ガ散ツテシマツタ(カ)デ(ラ)

花美しくば(未然)

花ガ美シ(イ)ナラ(ラ)

花美しければ(已然)

花ガ美シ(イ)ナラ(ラ)

即ち已然形を受ける時は、已然の意味と、又時には假定(條件)の意味と兩方に用ゐられる。

練習一〇九 文語の「寒くば」「寒ければ」の差異を問ふ。

練習一一〇 文語の「知らば」「知れば」「知れらば」「知りたらば」「知りたりせば」の意味を説明せよ。

練習一一一 左の文の○の部分に適當の假名を埋めよ。

- 一 明日天氣な○ば遠足せん。
- 二 折角相談中に候○ば程なく決定仕るべく候。
- 三 當日雨天に候○ば順延の事と御承知有之度候。



四 規則書の必要あ〇は事務所に請求せられたし。

五 かれ老いたりとも戦場にのぞ〇は必ず壯者を凌がん。

とも ども

いづれも前後の意味の反対な時に用ゐら

れる。「とも」の方は、假定を表し動詞及び動詞型活用の助動詞の終止形、形容詞及び形容詞型活用の助動詞の未然形に續く。

雨降るとも 我は行かん。

負けたりとも 相手を恨むべからず。

幼くとも 汝も武士の子ぞ。

腹をたてたくとも 我慢せよ。

●口語では雨が降つてもものやうに、連用形から連る。

「ども」の方は、確定を表し、用言の已然形から續く。

待てども 来らず。

雨止みたれども 空はなほ曇れり。

體は小さけれどども 力は強し。

登山したけれどども 案内を知らず。

●口語では「雨がやんだけれどども」の如く、けれどもを用ゐる。

かく、未然形を承ける「ば」と、この「とも」とは假定の條件を表すから文を假定の語で結び、已然形を承ける「ば」と「ども」は確定の條件を表すから確定の語で結ぶのが普通である。

晴天ならば

我(私)は行かん(ウ)

雨(が)降るとも(降ッテモ)

我(私)は行かず(ヌ)

雨天なれば(ダカラ)

雨(は)降らざれども(ヌケレド)

右の如く、「とも」と「ども」とは多少意味が違ふが、

給金は低くとも 應募者は多かるべし

のやうに、用ゐるわけねば誤解を生ずる恐れある外は、現代文では「と



も「ども」の代りに「も」を用ゐることが多い。「も」は用言の連體形を承ける。

雨降るも降るとも 我は行かん。

晴天なるもなれども 風寒し。

何等の事由あるもありとも 議場に入る事を許さず。

経過は良かりしもしかども 聊か疲労の状あり。

か や 「か」は連體形、や」は終止形を受ける助詞である。

有るか 無きか

有りや 無しや

しかし現代文では連體形から「や」に連ることも許される。

有るや 無きや

父に似たるや 母に似たるや

な 禁止の助詞「な」は動詞及び助動詞の終止形(良變や良變

に似た助動詞は連體形)から連る。だから、

功を急ぎて過するな。

親の恩を忘るるな。

は誤である。

●同じ意味でも、助詞の代に「勿れ」を用ゐれば、

親の恩を忘るゝ勿れ(正)

親の恩を忘る勿れ(誤)

●又「な」は間に用言の連用形(左變・加變は未然を挿入する。

練習 一一二 左の文中の誤を正し、且理由を述べよ。

一 今は留むるとも留まらじ。

二 萬一失敗すれども決して落膽するべからず。

三 敵多しとも恐るるな。

四 後にて悔ゆるな。



- 五 後にて悔ゆる勿れ。
- 六 主人なしとて春な忘れぞ。

練習一一三 次の語に、疑問の「や」「か」及び禁止の「な」を附せよ。  
 (又助動詞「勿れ」をも各に附してみよ。)

爲す 爲す 死す 死ぬ 留む 違ふ

●願望の助詞「ば」「なむ」は共に未然形から連る。特に「なむ」は相手の人又は物に對しての希望であるのを忘れてはならぬ。

花散らなむ(散レバヨイ。散ツテホシイの意)

花散りなむ(散ツテシマフダラウ)

は紛れやすいが、後の方は現在完了の「ぬ」の未然形「な」と未來の助動詞と結びついたのである。この二つは動詞の語尾でも區別する事が出来る。未然と連用と同形の動詞の時は、前後の意味で區別する他はない。

【注意】已然形から連る「ば」「なむ」等の「や」は疑問の助詞で、願望の「ばや」とは違ふ。

出世の望あればやまめくしく立働く。  
 多忙なればにや久しく文通だにせず。

練習一一四 左の古文を解し、——線の語の品詞を言へ。

- 一 代々に語り傳へたりとなむ。
- 二 歸りなん、いざ。
- 三 早ふるさとへ歸らなむ。
- 四 この由告げ參らせばやとて泣くくくなむ歸り來にける。
- 五 人はただ誠の道を守らなむ、たかきいやしきしなはありとも。

【五四】 その他の助詞で、用言に接する「が」「の」「に」「を」「ぞ」「か」「な」の「み」ばかり等はすべて連體形を受ける。

天も崩るばかりなり。  
 折々梟の聲淋しげに聞ゆのみ。  
 恰も機械水雷の爆發すにも似たり。



などは誤である。

練習一一五 左の文中に誤あらば正せ。

- 一 國賓を迎ふの辭。
- 二 かくて徒に年老ゆばかりなり。
- 三 病氣せざる様心懸くが肝要なり。
- 四 學ぶにも教ふるにもよき参考となる。
- 五 聞くだにも苦々しぞかし。
- 六 學問は重荷を負うて坂を攀ぶが如し。
- 七 昨今漸く實用に供せられんとするに至れり。

二一 副詞

【五五】 副詞は用言及び活用連語の意味を限定する任務を持つ品詞である。これに對し、形容詞は體言の意味を限定するもので

ある。

一 美しい花が咲いた

形容詞 體言

二 イ 花が非常に美しい

副詞 用言(形容詞)

ロ 花が綺麗に咲いてゐる

副詞

活用連語

の例の(一)の「美しい」は、どんな花かと「花」といふ體言の意味を詳しく説明したのであり、(二)の「イ」で「非常に」は、どんなに美しいかを、又(ロ)の「綺麗」には、どう咲いてゐるかといふ咲き方を説明したので、用言(或は活用連語)の意味を限定してゐる。同じ語を用ゐた

それは甚だしき誤なり 兩者甚だしく相違せり

の二文を見ても、形容詞と副詞との役目は了解されるであらう。

【五六】 なほ形容詞には活用があるが、副詞にはない。

【五七】 副詞は又他の副詞の意味を限定する。これも形容詞と



違ふ點である。形容詞は幾つ重なつても皆下の體言を形容する。副詞が重なると、二つ共下の用言の意味を限定するか、或は上の副詞は下の副詞の意味を限定するかどうかである。

(形) 大きい 白い 犬

大きくて 白い 犬

(副) 強く 烈しく 打つ

非常に 烈しく 打つ

【五八】 なほ副詞はいつも限定する語のすぐ上にあるとは限らぬ。數語を隔てて限定する場合も多い。

度々催促の使が來た

漸く目的地に達した

【五九】 これらの副詞には、本來のものの外、他の品詞がそのまま、或は複合語となつて轉成したものが多し。(漢語、動物の聲物の音などから來るものも多い。)

練習一一六 左の文中の副詞を拔出し、且どの語を限定してゐ

るかを説明せよ。

一 イ 愉快に遊びませう。

ロ 論旨頗る穩健なりき。

ハ 錦上更に花を添へむ。

ニ 忽ちバツと御光がさしました。

二 イ この計畫は非常に珍しいものだとのことである

ロ 財囊の底を見て節約するも既に遅し。

ハ 雨は益、烈しく、風は愈、強し。

ニ なかくはしこい人物だけれども、思慮が少し淺い。

三 イ 稍南に寄れり。

ロ もつと詳細に説明して下さい。

ハ いと嚴に仰せし御言葉今もなほ忘れられず。

ニ 必ずしも常に然らざらむ。



四 イ 卵色の雛つ子達がビョ〜と鳴きながらよろこ〜歩いてる。

ロ 遂に確實に我が軍に占領せられたり。

ハ さながら盆の水を覆すにも似たり。

ニ つくづくと一年を暮すほどだに、こよなう長閑けしや。

ホ さわ〜と我が釣りあげし小鱸の白さあぎとに秋の風吹く。

練習一一七 次の副詞を一つづ含んだ文を作れ。

専ら 断然 蓋し 毎日毎日 全く 恐らく

明快に バラ〜に ビチ〜と フワリフワリ

畢竟

復習 六

練習一一八 左の文の誤を理由を述べて正せ。

一 讀書は知識を廣むの第一法。

二 未だ一般に公開せしむを許さず。

三 懇に求めども馬耳東風と聞き流すのみ。

四 たとへ殺戮さるまでも誓つて敵に降服するな。

五 宗廟はやく祀りを断てども、一人の義に殉ひ恩に死す者無きといへり。 慨はししと言はんか、驚くべしと言はんか。

練習一一九 次の文中の動詞を指摘して、その種類と活用形とを言へ。

一 イ 教ふるは學ぶの半ばと知れ。

ロ あせればあせるほどまづく出来る。

ハ 優るとも決して劣るべくもあらず。

ニ 時鳥名をも雲居に揚ぐる哉弓張月の射るにまかせて。

三 軍樂隊の奉祝曲が、雨に煙る二重橋前の廣場に靜かに響き渡る。



と、整理してゐた女學生の一團は聲高らかに、三種の寶うけつぎての奉祝歌を合唱し初めた。其の快い韻律は、壯快な分列行進の後であつただけに、殊更優美な情調で場内を包んだ。

練習 一二〇 左の文中の——線の語の品詞は何か。

- 一 暖く快き日なり。
- 二 快く晴れた日だ。
- 三 泰然自若毫も恐るゝ色なし。
- 四 炯々たる眼光人を射る。
- 五 これ寧ろ人情の自然なりとす。
- 六 左の條々かたくお断り申し候
- 七 城かたくして拔けず。
- 八 防備をかたくして敢へて出でず。

【六〇】 これて國語の九品詞について略、學び得た。どんな文でもこの九品詞に分解出来るのである。

- (一) 谷間の黒みからだん／＼こちらへ迫つて来る  
名助 名 助 副 代 助 助 助 動  
長四、連用 加變、連體  
しく活、連體 加四、連用 左下一終止
- 黄昏の色を忙しい機の音が招き寄せる。  
名助 名助 形 名助 名助 動 動  
く活、連用 たり活、連體 指定、連用 時(過去)終止
- (二) あゝ彼は眞に尊く且偉大なる殉教者なりき。  
感 代助 副 形 接 形 動 名 助動 助動



文

二二 文の成分 (一) 主語 述語

【六一】 文は必ず主部と述部とから成立つてゐること、その主部と述部とを組立てる材料なる單語の、各品詞としての性質などについて大體知り得た。

さて文の主部を成す數語の中、その主題となる語は體言で、これを主語といひ、又述部中、主として、主題の動作・状態等を表す語は用言、又は活用連語で、これを述語と名づける。主語と述語とは文の中の缺くべからざる要素である。例へば、

主語 述語

この 繪 は ほんとに 美 しい

白い愛らしい 小犬 が 樂しげに庭を 驅 け廻つてゐる

その 音 遠雷の 如 し

【注意】 主語には、「は」がなどの助詞が添ふのが普通である。時には他の助詞も添ふことがある。

私も行きます。

雨さへ降り出でたり。

即ち「主語 + 述語」といふのが文の最も簡単な形である。

花 咲く  
雨 降る



練習 一二一 左の文中の主語述語を指摘し、且その品詞を言へ。

- 一 これは旨い。
- 二 風漸く強し。
- 三 實行は甚だ困難なり。
- 四 恐らくおまへも知るまい。

●主語か述語か(特に主語が省かれる場合が甚だ多い)

(私は今歸つて來たのです。

孝は百行の本(なり)。

命令の意味の文では殊に主語が省かれるのが常である。

(汝)來れ。

●排列は必ず「主語+述語」であるが、時に特に述語の意味を強める爲に順序を顛倒することがある。

疾いね、あの飛行機は。

【六一】 主語は體言、述語は用言、活用連語なのが普通であるが、時には用言、活用連語が主語に、助詞が述語になることがある。(但しはその主部或は述部の體言や用言が略せられたやうな場合に限る。)

主語 言ふは 易く

主語 行ふは 難し。

述語 汝は 幾歳か

練習 一二二 左の文中の主語と述語とを指摘せよ。

- 一 畏まりました。
- 二 負けるは勝。
- 三 誰方ですあなたは。
- 四 こちらに見えるのが衆議院か。
- 五 及ばざるは過ぎたるにまされり。



二三 文の成分 (二) 補語附文主

【六三】

生徒が 主部 本を 述部 讀む

その顔 主部 猿に 述部 似たり

山の芋 主部 鰻と 述部 なる

のやうな文で、主語と述語とだけ、即ち、「生徒が讀む」その顔似たり、「山の芋なるでは、まよまつた思想を言ひ表せない。「本を」猿に、鰻とがあつて始めて完全な文となるのである。かく、述語によつては、それだけでは主語の動作状態を十分に表し得ぬものがある。その場合には「を」に「に」と等の助詞を伴ふ體言を要する。これ等は

補語

述語の敘述を補ふものであるから、これを補語と名づける。

【六四】

母親が 主部 子供に 述部 菓子と 述部 與へる。

教師 主部 生徒に 述部 文法を 述部 教ふ。

のやうに二つの補語を要する述語もある。この場合、人には「に」、物には「を」の助詞を伴ふのが常である。また、

伊勢物語は 主部 一名を 述部 在五中將日記と 述部 呼ばる。

朝廷 主部 正成をして 述部 賊を 述部 防がしむ。

父の恩は 主部 山より 述部 高し。

妹 主部 姉に 述部 死なる。

小僧が 主部 番頭から 述部 頭を 述部 打たれた。

の   中の語のやうなものも補語である。



【六五】

我等は日本人なり。

佐久間大尉艇長たり。

その聲雷の如し。

汝は幾歳か。

彼何者ぞ。

のやうに、助動詞や助詞が述語となる時、その上に來る體言は補語と見做してよい。

●補語は普通體言であるが時にはそれに相當する他の語もなる。

氣候が暖くなつた。

辯舌流るゝが如し。

及ばざるは過ぎたるにまされり。

●補語は省略せられたり又意味を強める爲に位置を換へられたりすることもある。

明日またあなたに會ひませう。

それを私は望んでゐました。

【六六】

即ち文の最も簡單な形は、

主語 + 述語

か、或は

主語 + 補語 + 述語

かのいづれかの他にはない。

練習一二三 左の文中の補語を指摘して、その語の品詞を言へ。

一 歸るを待て。

二 あした天氣になれ。

三 今日私は先生から大變褒められた。



- 四 いつしか東の空は明らなりぬ。
- 五 顔色さながら生けるが如し。
- 六 先づ斥候をして敵情を探らしめむ。

練習一二四 左の文中の主語述語補語を指摘せよ。

- 一 拍手急霰に似たり。
- 二 柔よく剛を制す。
- 三 まあ、あれが狸々なの。
- 四 面目躍如たり。
- 五 おまへを私は固く信ずる。
- 六 子供が母親に御菓子を貰つた。
- 七 言はぬは言ふにまさる。

【六七】 時としては

日本人は毛髪黒し

文主

のやうな文がある。この文の述語は「黒し」であることは勿論だが、その主語は「日本人」ではなくて「毛髪」である。即ち「毛髪黒し」は一つの完全な文で、それが更に「日本人」を主語とし、その述部となつてゐる。これは日本語特有なもので、この「日本人」のやうなのを文主と名づける。

【注意】「日本人の毛髪は黒し」では、文主はない。

【六八】

我未だ代敷を習はず。

といふべきを

代敷は我未だ之を習はず。

といふことがある。此の場合の「代敷」は「之」と同じで、補語であるから、これを文主と混同してはならぬ。「之」を略して、

代敷は我未だ習はず。



といふ形にすると、一層文主と紛れ易いから注意を要する。

練習一二五 左の文中——線の語は文主か補語か。

- 一 鶴は頸が長い。
- 二 御羽織は私が出して置きました。
- 三 怒は敵と思へ。
- 四 漁火光淡し。
- 五 帝國議會は毎年之を召集す。
- 六 私は何だか頭が痛くなつた。
- 七 航空郵便物は特設のポストにお入れ下さい。

二四 文の成分 (三) 修飾語

【六九】 主語・述語・文主等は文の主要成分で、これら無しにはまともな思想は表せない。文の成分には、この他、これら主要成分の

意味を限定修飾する語がある。無くても済むが、あれば一層その思想が的確になる。例へば、

この油繪はほん<sup>主語</sup>とに美<sup>述語</sup>しい

の「この」「ほん」とに「が」それで、之を修飾語と名づける。修飾語には次の二種がある。

一 形容詞的修飾語 文の中の體言を修飾する語で、形容詞並びに動詞及び活用連語の連體形、若しくは「の」「が」等の助詞或は「に」於ける「を」伴ふ語等がそれである。

美しい花が咲いた。  
 散る花を追ふ勿れ。  
 それは叶はぬ望だ。  
 この世をばわが世とぞ思ふ。

修飾語  
形容詞的修飾語



學界に於ける功勞者

練習一二六 左の文中の形容詞的修飾語を指摘し、且いづれの語を修飾してゐるかを述べよ。

- 一 いづれも勿體ない聖旨に感激いたしました。
  - 二 怒れること烈火の如し。
  - 三 私達の故郷は太平洋岸の一小漁村です。
  - 四 これらの人々が學藝大會に於ける花形であつた。
  - 五 逆巻く濤を乗り切つて、勇敢なる主従は慕地にボートを進めぬ。
  - 六 飽かぬ眺に惜しき別れを告げて家路に向ふ。
- 二 副詞的修飾語 文中の用言及び活用連語又は副詞を修飾する語で、すべての副詞の他に「へ」「にて」「で」「より」「から」「まで」等の助詞或は「に於て」「を以て」等を伴ふ語などである。
- この繪はほんとに美しい。

副詞的修飾語

校長はいと恭しく勅語を捧讀したり。  
 彼方に聳ゆるが富士山か。  
 此處へおいで。

記念講演會は青年會館にて開催す。

鉛筆で書いてもよろしい。

午後一時より體格検査を行ふ。

東京から大阪まで長距離飛行を試みた。

これは將來に於て問題となるだらう。

日本は風光を以て外人に知らる。

【注意】 副詞的修飾語が助詞はを伴ふことがある。これを主語や文主と混同してはならぬ。

一回は我勝ちぬ。

昨日は大失策をしました。



又助詞の伴はぬ場合もある。

今朝神戸へ向けて出發した。

寂然聲なし。

昭和三年十一月即位の大禮を行はせらる。

練習一二七 次の文中の副詞的修飾語を指摘し、且いづれの語を修飾せるかを言へ。

- 一 大昔、或國に偉い王様があつた。
- 二 中繼放送は八時から始まります。
- 三 吾は自宅より徒歩にて行くべし。
- 四 先日は失禮しました。
- 五 姫百合は風情を以て勝れり。
- 六 なほ十分研究の餘地がある。
- 七 梅花は既に六七分。麥は未だ二三寸。

【七〇】 修飾語は幾つも重ね用ゐられ、又他の語を隔てて修飾したりするのは形容詞・副詞の場合と同じであるが、なほ、主要成分を修飾する他、修飾語中の體言・用言をも修飾する。

この富士山の繪は綺麗な繪だ

これはほんとに綺麗な繪だ

辯士は大層落ちついた態度で靜かに口を開いた

とにかく修飾語は常に修飾せられる語の上に来る。これがまた國語の特色である。

【七一】 修飾語を有する文の最も簡単な形は、  
形容詞的修飾語 + 主語 + 副詞的修飾語 + 述語



か、或は

形容詞的修飾語 + 主語 + 形容詞的修飾語 + 補語 + 副詞的修飾語 + 述語

かのいづれかである。

練習一二八 次の文の各成分に適當なる修飾語をなるべく多

く添へよ。

一 風が止んだ。

太郎魚を釣る。

練習一二九 次の文中の修飾語を指摘し、且その種類及びいづ

れの語を修飾せるかを言へ。

一 可愛らしい白い小犬が楽しさうに庭の芝生の上をしきりに駆け廻つてゐる。

二 ポン／＼と折々遠く一齊に聞ゆるは、土地に名高き狸囃子にや。

【七二】 なほ、文には、主語、述語、補語、修飾語及び文主等の成分の他に、

書を読み、又繪をかく。

お、月が出た。

のやうに、接續語（接續詞）や獨立語（感動詞）及びこれに相當する語を含むこともある。

練習一三〇 「學生」といふ語が、(イ)主語、(ロ)補語、(ハ)修飾語となる文を一つづつ作れ。

練習一三一 次の文を先づ主部と述部とに分ち、更にこれを各

成分に分解せよ。

一 驕る者久しからず。

二 大正十五年十二月二十五日以後を昭和元年と改む。

三 それは頗る簡易な生活だ。

接續語  
獨立語



四 勇まじき兄弟は平然として驀地にボートを進めぬ。

五 月は秋が一番よい。

六 お花や、おまへもう郵便を出したかえ。

七 商工業も既に各地に於て盛んとなつた。

八 新に造られた學校の花壇にも、いろ／＼珍しい草花が澤山集められた。

二五 句及び節

【七三】 主語述語補語等が一つづつでなくても、その互の關係が一度成立してゐるだけなら、これを一つの主語、一つの補語、一つの述語と同等に取扱へばよい。例へば、

この繪もあの繪も綺麗だ。

彼は勉強をも運動をも好めり。

宅の下男はよく飲み、よく食ひ、又よく働く。  
平家は都を追はれ、一の谷に潰え、八島に敗れ、終に壇の浦に滅びたり。

等は、二つ以上の主語述語補語を有するやうに見えるが、それは一つの成分に對して共同の主語なり述語なり補語なりをなしてゐるので、相互の關係は、

主語 + 述語      主語 + 補語 + 述語

の場合と同じことである。

練習 一三二 次の文を主部・述部に分ち、更にそれを各成分に分て。

- 一 麗子と久美子とは姉妹なり。
- 二 敵も味方も一度に喝采した。
- 三 三年啼かず飛ばず。



四 世に園女捨女智月尼秋色女及び千代女を元祿の五俳女といひます。  
 五 私共は更に高遠なる理想を樹て、そしてその實現を期せねばなりません。

【七四】

イ 「おまへが口を出すのは」まだ早い  
 ロ 光陰は「水の流るゝが」如し  
 ハ 「雪舟の描いた」畫はこれだ  
 ニ 「天氣晴朗なれども」波高しのやうな文では、「中の部分は、イ(ロ)ではそれぞれ「早い」「如し」といふ述語の主語・補語となつてをり、ハでは「畫」といふ主語の形容詞的修飾語となり、ニでは「高し」といふ述語の副詞的修飾語となつてをる。そして、各、「中の部分だけでも」「主語+述語」といふ形をな

句

してをる。ただ獨立した文でないだけで、文の要素は備へてある。かく「主語+述語」といふ形を備へ(時に一方が略せら)ながら、獨立を失つて、他の文の一部分となつてゐるものを句と名づける。

句は語のやうに主語にも補語にも修飾語にもなり得るのである。即ち、句を含んだ文はつまり「主語+述語」の關係が二回以上成立してゐるのである。(文主を有する文も同様である)

● 句が副詞的修飾語となる時は、「ば」「ど」「とも」「も」「や」「て」等の助詞によつて下の本文に續くのが普通である。

「無理が通れば」道理が引込む。

「終日待てども」友は來らず。

「雨降つて」地固まる。

「開會の時刻迫るも」集る者僅かに數名のみ。

【注意】 句が主語・補語・形容詞的修飾語等となる場合にとる助詞は、大抵語の場



合と同じである。

【七五】

イ 「禍は口より出で」「病は口より入る」

ロ 「春去り」「夏往き」「秋過ぎ」「冬来る」

の如き文では、主語 + 述語が對立してゐて、各「」の部分は同等の價值を持つて、一方が他方の附屬ではないから、句ではない。この各の部分を節と名づける。

【注意】 この場合最後の述語だけが終止形でその他は用言の連用形又形容動詞の「あり」に連らぬ原形で次の節に續く。(「て、して、ば」などで續くこともある) 助動詞は略せられて最後の節の述語にだけつく事が多い。

「風靜かに」「波穩かなり」

「松青うして」「砂白し」

「第一軍は鎮南浦に上陸し」「第二軍は鹽大澳に上陸したり」

節

これは共同述語の場合でも全く同じである。(七三)参照

【注意】 助詞「て、ば」等で下の文に續く時、それが句か節かは意味の上で、上の部分か下の文の條件理由を表すか、上下對等であるかによつて定めればよい

「雨降つて」「句」地固まる

「君が行けば」「句」僕も行くよ。

「燕去つて」「節」雁来る。

「鯉も居れば」「節」鮒も居る。

練習 一三三 次の文中「」中の部分は句か節か。句ならば文の

成分としての役目は何か。

一 「花咲く」春は來れり。

二 「發表のあるのが」待遠いなあ。

三 「用があつたら」手を鳴らします。

四 「夫婦相和し」朋友相信ず。

五 「大風吹けば」桶屋が喜ぶ。

六 「歌ふものもあれば」踊るものもある。



セ「義は金鐵よりも重く」死は鴻毛よりも軽し。

二六 文の種類

【七六】 文は構造上からは次の三種に分ち得る。

一 單文 主語述語の關係が唯一度成立つてゐる文。

花咲く。

この繪もあの繪も綺麗だ。

二 複文 一つ以上の句を含み、主語述語の關係が二回以上成立つて

ゐる文。

花咲けども鳥歌はず。

日本人は毛髮黒し。

三 重文 二つ以上の節を有する文。

花咲き鳥歌ふ。

重文  
合文と呼ぶ人もある。

單文

複文

平敘體

疑問體

感動體

命令體

【七七】

水は方圓の器に従ひ、人は善惡の友による。

又、性質上からは次の四種に分類することが出来る。

一 平敘體

花咲く。

花咲けども鳥歌はず。

二 疑問體

(反語の文をも含む)

あなたはいつ出發するのですか。

精神一到何事か成らざらむ。

三 感動體

壯なるかな言や。

ほんとお氣の毒なことだねえ。

四 命令體

汝自らを知れ。



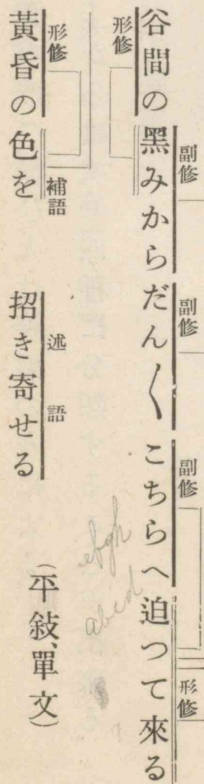
無用の者猥りに入るべからず。  
然し、實際の場合には、文はこれら三種四體の混合した複雑な形で表れることが多い。

【七八】 文を、主部、述部に分ち、更に各部をその成分に分解し、且その文が構造上性質上如何なる種類のものであるかを説明するのを文の解剖といふ。一二の例を示すと、

(一) 谷間の黒みからだんくこちらへ迫つて来る黄昏の色を忙しい機の音が招き寄せる。

主部 忙しい機の音が

述部



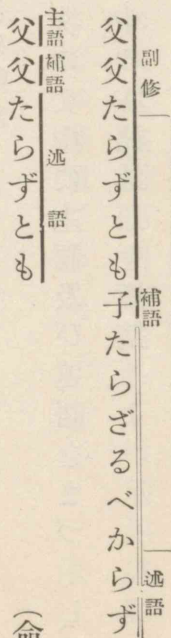
(平敘單文)

文の解剖

(二) 父父たらずとも子は子たらざるべからず。

主部 子は

述部



(命令複文)

練習一三四 次の文は構造上及び性質上如何なる種類に屬するか。

- 一 日暮れ道遠し。
- 二 綺麗な葉を裏返せば毛蟲が居る。
- 三 花ちやんもよしちやんも静さんもみんなお出で。
- 四 これこそ眞に意義の有る仕事ではないか。
- 五 世の中に正直が勝たなければ勝つものはなく。



六 如何御消光遊ばされ候哉。

七 見渡せば、花も紅葉もなかりけり。

八 東寺の塔は我を迎へて立ち、賀茂川の水は我を迎へて歌ふ。

練習一三五 次の文を解剖せよ。

- 一 希望者は履歴書を郵送すべし。
- 二 その聲猛虎の吼ゆるにも似たり。
- 三 天は勉強する人には勉強せざる人の到底想像し得ざる利益と快樂と嘉賞とを與ふ。

*aaaaaa*

練習一三六 次の文中の主語及び述語をまづ示し、又句あらば

次にその句中の主語・述語を指摘せよ。

- 一 碌々知りもせぬ事を平氣で得意げに彼はしやべりつゞける。
- 二 今日、夕方裏の畑の方へ散歩に出かけた。よく晴れた日が斜に野一ぱいに照り輝いてゐる。農夫の動かす鍬があちこちできら

きらと光る。昨日の收穫の跡を鋤き返してゐるのだ。

二七 呼應附係結

【七九】 文を結ぶには、述語が用言若しくは活用連語である場合は終止形を用ゐるのが普通である。

花 咲く

花 も 美し

花 さへ 散りけり

【八〇】 しかし、上に意味を強める助詞「ぞ」「なむ」又は疑問の助詞

「や」「か」がある時は連體形で結ぶのである。

花 ぞ 咲く

花 なむ 美しき

風 や 吹くらむ



結 係

Mar makda tadpko  
Pasa abcd ef ghopqrst

誰か知るべき

【八一】 又、上に「こそ」がある時は已然形で結ぶ。

花こそ咲け(命令形ではない)

花こそ美しけれ

風こそ吹くらめ

【八二】 この「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」等を係といひ、これに應ずる下の連體形已然形の語を結といふ。

●古文では係結の法則は嚴重に守られてゐた。但し、結の略せられた文もあり、又句の中の係は、本文の方の結には變化を與へない。

はるばると川に臨める眺いと面白くなむ(ありける)

御賞美こそあるべきに御勘當とは情なし。

●口語には係結はない。「こそ」は用ゐるが結には變化を與へぬ。  
それこそ幸だ。

呼 應

練習一三七 左の文の係結を説明せよ。

一 世に人なきやうに振舞はれけるこそゆゝしけれ。

二 駒を波間に乗り入れて、沖なる御座船さしてぞ泳がせたる。

三 柿本人麿なむ歌の聖なりける。

四 さても慨はしき事どもにこそ。

五 朧月夜にしくものぞなき。

六 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる。

【八三】 文には、なほ種々の言ひ出しに對して、それぞれ適當な結方をせねばならぬものがある。これを呼應といふ。

況や人間に於てをや。

宜なるかな芳名を千載に残ししこと。

希はくは御一讀の榮を賜はらんことを。

計らざりき旗鼓の間に相見えんとは。







と、整列してゐた女學生の一團は聲高らかに三種の寶うけつぎての奉祝歌を合唱し初めた。其の快い韻律は、壯快な分列行進の後であつただけに、殊更優美な情調で場内を包んだ。

ニ あつ、もう私の番なのだ。高鳴る胸をおさへながら、スタートに立つた。涼しいそよ風が頬を撫でる。私は鉢巻をしめ直しつゝ、スタンドの方へ眼を向ける。黒山のやうに堆くなつてゐる見物人が皆私の顔を見てゐると思ふと、嬉しいやら恥かしいやら顔が火のやうに熱くなる。

三 湖は暗い。この時遙に一點の光をば認める。その光は揺れる。風の吹く度に揺れる。波の音する度に揺れる。鐘の音に揺れる。櫓拍子の音に揺れる。囁くやうな人聲に揺れる。光は揺れる、さうしてその光は近づく。その光は近づく、さうしてその光は揺れる。忽ち漆黒の闇の中に浮彫の如く畫き出されたものは一艘の

船である。

練習一四一 次の文を解剖せよ。

- 一 この最も簡便な方法をおまへはなぜ選ばなかつたか。
- 二 雪空全く晴れ、日影一しほまばゆし。松の枝はおのづとはねあがり、軒の雫こゝかしこより垂る。
- 三 淺黄色にぼかされた可憐な紫陽花が生垣の傍に見出される頃、世はもう梅雨に入つてゐる。

練習一四二 左の文の誤を正せ。

- 一 憾むらくは大事既に去れり。
- 二 眼前の小利に惑はさるゝな。
- 三 須らく正々堂々たれ。
- 四 忍耐の徳を缺かざらんか、いかでか最後の勝を收むるを得べき。
- 五 この人を大將として合戦せば、いかばかりか頼もし。



六 いくらおめでたい私でも、そんなにおだてたりけなされたり、玩具にしてたまるものか。

七 況や興廢一擧に決するの秋なり。

八 記せよ、日本は最早東洋の日本に非ずして世界の日本なり。宜しく上下心を一にし、男女力を協せて、建國以來の大精神を宣揚に努めざるべからず。

改訂女子日本新文法 終

動詞所屬一覽

加行變格  
佐行變格

文語  
來  
爲  
あはす  
國語の名詞・漢語・洋語、及

口語  
來  
爲る

女(一)

カード五枚入



動詞所屬一覽

加行變格

來文語

佐行變格

爲あはす  
國語の名詞・漢語・洋語、及  
び副詞とすとの複合語

奈行變格

死ぬ(四段にも用ゐる) 往ぬ

良行變格

有り(四段にも用ゐる) 居り(四段にも用ゐる)

侍り

下一段

蹴る

同上(四段にも用ゐる)

上一段

著る 似る 煮る  
鑑る 見る 顧る  
鑄る 惟る 射る  
居(ひ)る  
用(波行上二段にも用ゐる)ゐる 率ゐる

同上

右の外の動詞中

下二段  
上二段  
四段

未然形「エ段」なるもの  
未然形「イ段」なるもの  
未然形「ア段」なるもの

下二段  
上一段  
同上



品詞一覽

名詞

内閣總理大臣  
高さ

第四號  
もの(物・者)

コロツケ  
こと(事)

笑

代名詞

わ かれ どちら 何 そいつ 貴殿

動詞

有り(る) 笑ふ 用ゐる 蛇蝎視す(する) うち棄つ(てる)

形容詞

無し(い) 高し(い) 甚だし(い) 静けし 馬鹿々々し(い)

助動詞

なり た む られる 如し

副詞

甚だ 甚だしく 謹んで 静かに さらくと

接續詞

或は 且又 そして 加之 處 條

助詞

と て にして より ばや かな

感動詞

すは やい へえ さあ〜 南無三



文語助動詞活用一覽

女(三)

一 動詞型活用の助動詞

種類	受身 敬語	使役 敬語	指定	時	推量	咏嘆
動詞 活用	(未然)〔打た〕 (未然)〔尋ぬ〕	(未然)〔打た〕 (未然)〔尋ぬ〕 (未然)〔打た〕 (未然)〔尋ぬ〕	(連體)〔打つ〕 〔學生〕	(連用)〔打ち〕 (命令)〔書け〕	(終止)〔打つ〕 (終止)〔尋ぬ〕	(連用)〔尋ぬ〕 (終止)〔尋ぬ〕
未然	られ	させ	たら	たら	○	○
連用	られ	させ	たり	たり	○	○
終止	る	す	たり	なり	めり	なり
連體	る	する	たる	なる	める	なる
已然	るれ	すれ	たれ	なれ	めれ	なれ
命令	られ	させ	たれ	なれ	○	○
接 續	右以外の動詞に	四・奈變・其變に 右以外の動詞に	體言及び用言に 體言のみに	各動詞に 但し「ぬ」の活用 のみは奈變に連 らぬ	各動詞に 但し其變は連體 形に	各動詞に 但し其變及び其 變型助動詞は連 體形に及び助動 詞「なり」に



二 形容詞型活用の助動詞

種類	推量	打消	比況	願望
動詞 活用	(終止) [打つ] [尋ぬ]	(終止) [打つ] [尋ぬ]	(連用) [打つ(が)] [尋ぬ(が)]	(連用) [打ち] [尋ね]
未然	べく	まじく	ごとく	たく
連用	べく	まじく	ごとく	たく
終止	べし	まじ	ごとし	たし
連體	べき	まじき	ごとき	たき
已然	べけれ	まじけれ	○	たけれ
命令	○	○	○	○
接	各動詞に	各動詞に	用言に 又は助詞「が」 「の」の下に	各動詞に
續	各動詞に	各動詞に		

女(三)

三 特殊の活用をなす助動詞

種類	打消	時	推量	推量
動詞 活用	(未然) [打ち] [尋ね]	(連用) [打ち] [尋ね]	(未然) [打ち] [尋ね]	(終止) [打ち] [尋ね]
未然	○ ザ	○	○	○
連用	○ ザ	○	○	○
終止	○ ザ	き む	らし	まし
連體	○ ぬ	し む	らし	まし
已然	○ れ	しか め	らし	まし
命令	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○
接	各動詞に	各動詞に	各動詞に	各動詞に
續	各動詞に	各動詞に、但し加 變・佐變は除外例	各動詞に、但し其 變は連體形に	各動詞に、但し其 變は連體形に

F.T



解剖

谷間名の助黒み名から助だん副く代こちら助へ助迫動、長四連用つ助て助來動、加變連體る名黄昏名の助

色名を助忙形、しく活連體しい名機名の助音名が助招動、加四連用き動、佐下寄動、終止せる

主部 忙形修しい形修機形修の主語音主語が

述部 谷間形修の副修黒み副修から副修だん副修く副修こちら副修へ形修迫形修つ形修て形修來形修る形修黄昏形修の補語色補語を

招き寄せる述語

平敘單文







昭和四年八月五日印  
 昭和四年十一月十二日訂正再版印刷  
 昭和四年十一月十五日訂正再版發行



編者 藤村 作

編者 島津 久基

東京市牛込區拂方町二十七番地

發行者 佐藤 正叟

東京市京橋區銀座西二丁目三番地

印刷者 高橋 郁

訂改	女子日本新文法
定價	金七拾錢

東京市牛込區拂方町二十七番地  
 振替口座東京二九五〇七番

至文堂

電話牛込(長)四四四五番  
 四四五六番



中三十五期生入組

田坂元子